A　S　S　B

（オルタナティヴ・システムズ・スタディ・ブレティン）

第７号　（１９９３年１０月３０日発行）

目　次

１．不況で資本主義は滅びるか？　千田智之

２．精神医学の現場から　平野　啓
　BORDER／LINE（9）

３．革命の戦術についての随想（２）　安藤一夫

５．文化人類学ノート　安藤一夫

編集人　安藤一夫

発行所　ＡＳＳＢ編集委員会
京都市中京区新椹木町通り竹屋町上る西革堂町１７８　京都ガイア研究所内
tel.　０７５－２１２－２４３０　fax.　０７５－２１２－２６５５

会費　正会員　：年間１口　１０万円
　　賛助会員：年間１口　３万円
　　購読会員：年間１口　１万５千円

会費振込先（郵便振替）

（口座番号）京都９－６７２８３　（口座名）資本論研究会

不況で資本主義は滅びるか？

（中年３人，酒場の片隅にて）

千田 智之

☆鼎談に登場する人

Ｐ＝47才，マスコミ関係者．関西有名私大社会学部卒．大手新聞社で長らく社会部第一線の記者をしていたが，最近役員室勤務という，言わばエリート・コースに不本意にも乗らされた．本人としては，「現場失格」かと悩む．経済・経営学は苦手．会社も広告収入の大幅減で苦しい．最近は生物社会学に興味がある．共著なれど，著書３冊．ヤクザの実態をレポートしたものは結構評判になった．

Ｑ＝43才，地方公務員．公立大法学部卒．福祉関係に携わり，市役所ではうるさ型として有名．中学生の長男の反抗により，自分の福祉教育論は間違っていたのではないかと，深く傷ついたが，北欧を中心とした海外視察団（老人福祉及び老人医療関係）に最近参加して，気分一新，やる気になっている．著書はないが，労組や地域の婦人会などの集会では講演を頼まれることがある．

Ｒ＝40才，マーケッティング調査会社の最年少取締役．国立大文学部心理学科大学院中退．独身．自ら「野に遺賢あるとすれば，私がそれだ」と称する自信家．株式や証券の売買で財を築いたと言うが，誰も確かめたことはない．蔵書家で勉強家．業界誌や専門誌には多数の論文，ケース・スタディを発表しているが，自分の著書はない．ゴースト・ライターとしては隠れた逸材．

（ＰとＱは，学生時代に学生運動で知り合って以来付き合いを続けて来た．Ｒは，Ｑの町に住む高齢の両親の介護問題で，Ｑの世話になり，付き合いが始まった．３人の“夢”は，共同で，書庫付きの書斎用の別荘を持つことである．）

Ｐ；こうして，３人が一緒になるのは久しぶりだな．だいたいＱがなかなか出て来ない．公務員なんだから，時間外の拘束なんてのはないんだろ．

Ｑ；いや，申し訳ありません．台風もあったし，８，９月も雨が多かったでしょ．自分の町でなくても，水系が関係している地域で「警報」が出ると，役所は全員居残りなんですよ．自分のところに「大雨警報」なんてことになると，非常呼集がかかる．

Ｒ；本当に，雨が多かったですからね．日本の観測記録史上最高の年ですよ．でも，Ｑさんは担当じゃないじゃないですか．河川とか，防災，土木，交通なんてことなら分かるけれど．

Ｑ；府県とか，中央ならそうなんだが，小さな市ではそうはいかない．何かあった時に役所の人間が揃っていないなんてことになると大問題になるの．ほら，よくテレビなんかで見るけれど，何かあった時に，市長が作業服を着て，ヘルメットなんて被って会見しているよね．新聞記者やテレビが来てなかったら，あんなことはしないんだよ．室内でヘルメットを被っていても仕方がないのにね．という訳で，大阪に出て来たのが本当に久しぶりなんだ．御堂筋の銀杏もすっかり色付きましたね．だけど，年々ひどくなっているように思うんだが，銀杏の葉が小さいままで枯れている．うちの所とまったく違う．色も悪いですよ．

Ｐ；毎日見ていると気づかないね．排ガスのせいもあるだろうが，最近ではヒート・アイランド現象も問題になっている．それと，地下利用かな．

Ｒ；そうでしょうね．御堂筋に限ったことじゃないですが，大阪の都心部であんなに大きな木が植わっているのが，もう奇跡ですよ．地下水脈なんてのは余程深いところでないとないだろうし，コンクリートの下はもう自然の大地とは何の関係もないでしょう．御堂筋の銀杏だって，マンションのベランダのプランターに植えた草花と変わらない．水もやり，肥料や薬で手入れして，年間数億円使っているんじゃないかな．Ｐさんならご存知でしょ．あの銀杏を維持するのは，立派な利権ですよね．特定の園芸業者が儲かっていると思うな．だから，大規模な地下駐車場を作るのに反対している地域もあるんですが，その理由がね，出入り口になる市の公園の樹木に悪影響があるから，なんて言ってる．無知と住民エゴですよ．今目の前にあることしか信じないんだから．市内の公園の木なんてのは，今や植木鉢の植木です．もっと，新聞で正しく報道すべきじゃないですか．いたずらに，市民や住民に迎合していたら駄目ですよ．

Ｐ；おやおや，Ｒくんにしたら珍しく感情的だな．意外な事実なんだが，大阪府はね，街路樹の充実ぶりでは全国有数なんだよ．確か，総数では３位，道路１キロ当りでは２位だったと思う．全国的に見ても，最も人気のある街路樹はと言うと，これが銀杏なんだ．60万本近く植えられていると言うよ．ところで，テレ朝じゃないけれど，マスコミは今本当に微妙なんだ．神経質になっているよ．役員室にいてもちっともおもしろくない．

Ｑ；ぼくもね，住民エゴにはほとほと困っているんですが，Ｐさんには，是非聞きたいことがあるんです．新聞やテレビは中立公正じゃないし，そんな必要もないんじゃないでしょうか．あのテレ朝のなんとか言う報道局長はいかにも権力者面していたけれど，55年体制というか，自民党政権をひっくり返そうと言う主張があってもいいんじゃないですか．Ｐさんのところもどちらかと言えば，野党的な論調でしたよね．つい最近までは．

Ｐ；そうなんだ．神経質になっているのはそれもある．８会派の連立内閣，今のところ細川さんの支持率も７割なんだから，政策に文句をつけたい，特にその決定のプロセスの不透明さは自民党時代と余り変わらないことに批判的な論陣を張るべきだとしても，やや憚られる．新聞の存在意義が分からなくなっているような気がするんだ．しかし，テレ朝はああ言うように釈明しているけれど，自民党批判は意識的だったとしか思えない．田原とか久米というバッターを前面に出した以上，こうなるのは読めていたのじゃないか．特に，「嘘つき総理」のインタビュー場面はくどいくらいに流されていたんだから．いかに免許事業だといっても，いまさら弱腰になって頭を下げたり，あの局長をクビにするのは情けないよ．

Ｑ；ぼくは，テレビだって主張があってよいと思いますが．それに，本当にテレビに影響されて投票しているんでしょうか．久米の番組では，どちらかと言えば，投票率を上げようというキャンペーンをしていたと受け取っているんです．久米の口ぶりでは，高い投票率が自民党の過半数割れ，政権交代につながる，と言う感じじゃなかったですか．

Ｒ；ぼくは，ちょっと見方が違う．テレビってのは視聴率争いに躍起になってますね．視聴率と言うのは，商品の購買や選挙の投票とは本来的に異なっている．もし，放送が言論機関なら免許事業って言うのはまったくナンセンスです．まあ，それはともかくとして，民放はスポンサーからの広告料で成り立っていますよね．その広告料はいずれ消費者が負担するんだけれども，スポンサーを無視した「正義の配分」はできないですよ．「交換」するものが，視聴者とテレビ会社にはないんだから．そこへ行くと，新聞は広告料以外に購読料もある．売上が上がることは，それだけ主張が支持されていることになるはずです．

Ｐ；おっと，これは困った．うちは購読者数が減って，困っている．不景気もあるけれど，広告収入

もガタガタに減っている．うちの主張は支持されていないことになってしまうじゃないか．

R；もち論，そういう面もありますよ．だけど，新聞てのは，家庭欄からスポーツ欄まであって，一つの番組の視聴率を争うテレビとは違います．テレ朝問題で言うと，放送法の規定は，「配分の正義」を言っているので，「正義の配分」を禁止している訳じゃない．そうだとしても，ぼくは，テレビのキャスターが月光仮面のように正義の味方面をするのが気にくわないですね．

Q；配分と交換ってのがよく分からないね．

R；社会部ネタ的に言うとですね，男と女のもつれでよくあるパターンは，女の場合，自分の男を取った相手の女を殺すでしょ．これが「配分の正義」とすると，男の場合は，他の男に走ったその女を殺すというケースが多い．これは「交換の正義」と言える．つまり，等価交換ですよ．嫉妬深いのは女ではなくて，男だと言う意見になるんですが．

Q；じゃあ，女は損だ．

R；どうしてですか．

Q；どちらのケースも，女が殺されている．男と女がもつれるのは世の習いだとすると，女の方がどんどん減って行くことになるよ．

R；あーっ，全然気がつかなかった．そうか，そうすると結局は男も女もあまり殺さないんだ．殺すと刑罰があるから，新しい相手を探すことによって復讐する方が，コストが安いんだな．この理屈はね，女の方がラディカルだってことを言いたかったんですけど．

P；苦しかったね．それにしても「正義の配分」と言うのはおもしろい．確かに，初期のテレビは，独自の人材ってのはないから，幹部も含めてラジオより新聞から行った人が多いね．今の局長クラスではもうプロパーの人達じゃないかな．新聞よりに言う訳じゃないが，そういう人達は言論人としての自覚や訓練には欠けるかも知れない．今回の事件ははしなくも，テレビにかかわる人間の傲慢な面があらわになったけれど，あれは内輪の集まりでの発言なんだよね．そういう所では誰だって，おおげさになり易いもんだ．だけど，スポンサーに接する部門と報道や制作部門とでは全然違うよ．世間が言う程には，スポンサーの圧力ってのは即座にはかからない．今回のように，番組の内容以外のところで問題を起こした場合の方が，スポンサーは怖いよね．

Q；そう言えば，昔ブラウンとかいう作家のショート・ショートに，「スポンサーからの一言」というのがあったっけ．

R；フレデリック・ブラウンですよ．懐かしい名前だ．星新一の元祖みたいな作家ですが，今から思えば，冷戦ネタが多かった．あのオチ覚えてますか．「天の声」がするんですよ．「人類諸君，スポンサーから一言．“闘え”」って言うんです．だけどね，正義というのは，もち論主観的なものなんだけど，テレビやマスコミが「正義の配分」を止めたら誰も見ないようになると思う．タイガースに極端に偏った実況だってね，やはりそれなりの「正義の配分」なんですよ．力道山と外人レスラーと闘っているのに，均等に力を入れて実況しなさい，なんて放送法に書いてある訳じゃない．政治とか天皇制に関して偏向してはいけません，と書いてある訳じゃないけれど，とにかく中立公正を過剰に意識する．そういうのってのは，やはり逆の偏向なんですよ．

P；リスクを避けているのさ．筒井康隆のように断筆宣言できる人はいいよ．新聞社で一番問題になっているのが，差別発言，差別用語だね．これはもう大変．だけど，ぼくが不思議に思っているのは，たとえば，竹内久美子．あのいい加減な遺伝子理論や動物行動学の応用，と言うより乱用はないね．まったく馬鹿にしているんだが，女による女の逆差別にはフェミニスト達は批判しないのかね．

R；そうですね．彼女の本はどれも単なる俗論なんだけど，とりあえず学問的な装いを持たしていますから，批判しにくいんでしょうね．しかし，ドーキンスの「利己的」な遺伝子という命名自体もちょっと問題ですよね．利己的と言うと，何かちゃんとエゴがあって，その意志で自分の得になるように行動するみたいに聞こえてしまいますから．あれは，結果を見てそういうふうな解釈をした方がよさそうだ，ということですよね．だけど，生物学者からは徹底的に批判されてしまいましたね．さすがに，竹内も同じようには発言できないでしょう．追い打ちのように，東大の真木悠介が，最近出した『自我の起源』という本で，生物社会学の俗論的な利用を警告しています．

P；生物社会学のテクニカル・タームが誤解を受け易いのは確かだ．アリやハチのある種のものは社会性昆虫の完全形と言われているが，例えば，女王アリとか「カースト制」とか，人間社会の概念を援用しているだけで，言葉から受ける誤解の弊害は大きいかも知れない．Rくんの言う通り，生物が利己的でなかったら，現に存在していることがおかしい，って言う程度の意味で「利己的」と理解しておくのでいいんじゃないかな．

Q；利己的な存在というのは，そうすると，自分の老いた親の面倒なんてみないことになるんだろうか．住民エゴの問題も似たところがあるんだけれど，一人一人は皆優しくて，ものの分かった人なのに，自治会や住民集会をやると，ころっと変わる．

R；アンケート調査でもそうでしょう．あれは，本音が出ているとは単純に言えない場合があるんです．有名な「ホーソン工場の実験」というのがあるのだが，調査の対象となる人々が調査されていることを意識しちゃうと結果に偏向が出てしまうんです．物理学のハイゼンベルクの不確定性原理の社会調査版とも言えます．

P；社会学では，マートンが名づけた「トーマスの定理」なんてのもあるしね．

Q；「自己成就的予言の危険性」というやつでしょ．ちょっと違うかも知れないけれど，何らかの問題で「住民エゴ」が噴出するとね，本当に事態は悪い方へ行ってしまうんですよ．何か不利益なことがおきそうだからエゴが浮き彫りになるじゃないですか．そうすると，ちょっとした妥協で解決できるはずだったのに，どんどん難しいことになったりすることがあるんですよ．Rの言った公営の駐車場の建設問題と同じようなことを，ぼくの所も経験している．もともと，それが本当に必要なのかどうか議論すれば済むのに，役所の態度が許せないとか，税金を特定の人の利益になることに使うのはけしからんとか，話が変な方に展開してしまうんですよ．

P；「見えざる手」が働かないんだね．今は利他的にしか見えないことでも，結局自分の利益につながることがあるのに，それが分からなければうまく働かないんだ．だから，老人福祉の問題で言うと，今の相続税を軽くするとか，民法の相続規定を変えると解決するという人もいるよね．財産を受け継ぐためには，親を大事にしようということになるからだろうが．

R；いやだな．ぼくへの皮肉ですか．言い訳じゃないですが，高齢の親を介護する余裕のある人はちゃんと面倒見ますよ．これは押さえておかないと，結局家の規模とか所得とか，心理や道徳よりも条件整備が先ず大事です．それから，家族制度とその意識ですよね．特殊な介護技術が必要な場合は仕方がないけれど，人間らしい功利主義的な側面では，制度的なインセンティブを働かす必要があるのは認めなくてはならないのかな．

Q；生物の遺伝子には，老いた親の面倒を見るてのはないんですか．

P；生物の種類にもよるけれど，自分の遺伝子が継承されてしまえば，個体としての役目は終わりだな．蜜蜂のオスは，一発の性交で死んでしまうんだから．老いたサルは群れから離れて死ぬだけ

だ．人間の場合，これだけ皆が長生きするのは歴史始まって以来じゃないか．老人を大事にするのは，文化や習慣もあったけれど，一族としてのメイン・メモリーみたいなもので，知識や技術を保存，伝承する一つの方法だったかも知れない．そうすると，遥か昔では，長生きした人が多い一族ってのは，一つの権威だったかも分からないね．不老長寿伝説は世界中にあるから，それは長命願望を表しているんだ．だから，長生きの遺伝子が淘汰されて残って来たのかも知れん．

Ｒ；ぼくも，そう思います．だいたいね，数世代くらいの経験が遺伝子に発現するなんてことはあり得ないですよ．遺伝子情報に対して，もう少し概念的な整理が必要です．例えば，オーギュスト・コントが学問の階梯を言った時には，生物学は社会学の上位の学問だったんですよ．

Ｑ；階梯ってのは，何のこと．それに，なんで突然コントが出て来るんだよ．

Ｒ；さっき，Ｑさんが55年体制とか言ったでしょ．それよりも40年体制の打破とか，もっと逆上って30年体制だとか言う人までいるけれど．

Ｑ；コント55号か．なんて連想するんだよ．

Ｒ；階梯と言うのは，階層的秩序とでも言えばよいのかな．コントは，数学を最高位の学問として，基礎科学という概念を提起したんです．その下に，天文学，物理学，化学，生物学，社会学というように，６段階の序列をつけた．そして，ここが大事なことなんですが，上位の学問が下位の学問を規定しているというように，その学問の対象となる現象は後の学問が扱う現象から独立していると定義するのです．下位の学問の概念は上位のものより豊富になるんですが，下位のものを上位の学問に援用するのは，コントに言わせれば，階梯を無視した，とんでもないことだ，となりますね．

Ｐ；数学が諸学の女王だと言ったのは，パスカルだったかな．Ｒくんが言ったことにちょっと付け加えると，コントは，生物学ではなくて，生理学と称していたし，社会学ではなくて社会物理学と言っていたよね．

Ｒ；おっしゃる通りです．ところで，功利主義的に考えると，自分が年をとった時に若い者から大事にされようと思えば，元気で力があるうちに，そういう道徳やシステムを社会的に作ることでしょうね．つまり，自分が年寄りを大事にしていないのに，年をとってから大事にされるはずがない，と言うことになる．長命系の一族に生まれれば，だいたい俺も70，80まで生きるんじゃないかと分かりますよね．それよりも，そういう伝統的な志向を失わせるものがどんどん出て来たことの方が問題ですよ．本やコンピュータがあれば，人間の外部メモリーは一族の老人に頼る必要がない．だいたい伝承の効用が，世の中の変化でなくなってくる．それから，最も肝心なのはお金ですよ．そのストックの形式や方法が増えた．それが大量にあれば，子供に頼らなくてもいいことになる．

Ｐ；沢山あれば，ほっといたって子供の方が擦り寄って来るさ．Ｒくんの年じゃ実際には知らないだろうけど，ぼくが中学生くらいの時か，そのちょっと前かな，「集団就職」なんて，地方や農村からどんどん都市へ人口が流れて行ったよね．「出稼ぎ」とはちょっと違う．高度成長が終わって，ユーターンなんてこともあったけど，老人の介護でどうとかと言うのは，ぼくらも含めてだけど，その世代が中心じゃないか．「棄民」なんて言えば語弊があるけど，放り出された人達がね，今度は親を引き取って面倒みろ，と言われてもなかなか．

Ｒ；農村部から大量に労働力を吸収した都市の代償が，地方交付金による資金の還流だったりして．だから，親の面倒も国や自治体がみるのでは．

Ｑ；冗談じゃないよ．現実の問題なんだ．まったくおかしいのは，自治体の介護補助で，今時間給千

円でパート労働に頼っている．自宅介護には何の手当も出ないんだけど，家で面倒をみれる人には，自治体が時間給を払ってでも，なるべく自分達のことは家できちっとした方がいいんですよ．その方が全体としての負担もきっと減ると思うな．そうしないと，家に老人がいるのに，それは他人の介護に任せて，自分は他へ介護に行く方が儲かるなんて考えるのも出て来る．現にそういうケースがあるんですよ．そんなことでは，ぼくらが年をとった時にはどうにもならないことになっていますよ．

Ｒ；済みません．つまらないことを言ってしまって．確かに，公的な高齢者介護施設を各地に新たに作るよりも，そうした必要のある世帯に住宅改造資金を提供する方が全体としてはコストが低い，とは言われていますね．景気を刺激するにも，本当はその方がいい．だけど，ぼくがポスト団塊の世代だから言う訳じゃないですけど，労働集約型の経済が資本蓄積の進行で変化したのですから，社会的に見ても，年とった団塊の世代を支えるのは，人間じゃなくて資本かも分かりませんよ．

Ｐ；経済のサービス化とか，ストック化と言うのは多分そういうことなんだろう．だけど，そういう必要性とそのための準備態勢作りというのは，きっとうまくシンクロナイズしないよ．一世代や二世代では無理だろうな．社会的な痛みや失敗ってのはかなりの衝撃としてすみずみまで広がってから，反省と仕切り直しが具体的に生まれてくるだろ．バブルの問題もそうだし，高齢化社会のことにしてもそうじゃないかな．

Ｑ；そんな，何世代もかかっているうちに，高齢化社会も終わっていますよ．

Ｒ；社会的な痛みと言うのは，Ｐさんらしい表現ですけど，バブルについてはちょっと違うことも考えておかないと．

Ｐ；どういうことだい．

Ｒ；突発的で理由のよく分からないバブルってのは，過去の日本も経験しているんです．例えば，明治には万年青とか兎が投機の対象だったことがあるんですよ．オランダのチューリップ投機と似ていますね．トルコ産のチューリップってのが，ヨーロッパでは珍しかったように，異国的な希少性のある商品が投機の対象となって貨幣欲を刺激するんですよ．だけど，土地や株はこの社会でのちゃんとした資産ですから，投機で高騰したからと言ってバブルなんて表現するとまずい．臭いものに蓋じゃないですか．株や土地なんてのは，低所得者層や庶民には関係のない世界の話じゃないですか．首都圏で株式を保有する世帯は全体の26％，このうち88～89年に本当にキャピタル・ゲインを手に入れた世帯は12％だった．つまり，全世帯の８分の１にもならないという調査もあります．土地については，東京都内の１％が譲渡利益を得たに過ぎない，ってことが分かっています．

Ｑ；でも，それが弾けると庶民にも関係して来る．この不況では皆さすがに困っているよ．

Ｒ；いや，不況や恐慌というのはこんなものじゃないですよ．アメリカのね，1930年から33年の大不況ではその４年間で，卸売物価は30％以上下落し，ＧＮＰは名目ベースで46％，実質で31％も減少したんです．失業率はピーク時の33年で25％にも達してしまった．今の日本でも相当深刻な不景気には違いないんですが，アメリカの大不況でも，国際的に「独り勝ち」した国が，結局そのシッペ返しを受けるみたいなところがありますね．

Ｑ；とは言うものの，不景気には違いないだろ．

Ｒ；ええ，景気というのは相対的なもんですからね．大事なのは，景気の水準とその方向性ですよ．方向性というのは，上向いているのか，下向きなのか，ということですが，今はまだどちらを向

いているのかよく分からない．これは心理的には大きいですよね．それから，水準ということでは，87年から90年いっぱいまで過熱し過ぎた．この落差はすごいです．しかも，統計で見ると，その時の給与は，全体としては名目ＧＮＰの伸びとそんなに変わらない．特に，サラリーマンが楽になったかと言うと，物価が安定していたことと，経済が過熱していましたから，ノルマの消化は楽だった．営業にそんなに努力しなくても成績がよかったってのはあります．だけど実際には，産業景気と言うか，企業の資金繰りや操業状態が，一部には働き過ぎが出るほど好調だったんですよ．ぼくがマクロ統計で見たのでは，87年度の企業の在庫投資の実質額の伸びは約82%，88年度ではなんと160%，設備投資は，88年度から90年度の３年間とも実質10%以上の伸びです．去年がマイナスの６%，今年が８%のマイナスの予測ですから，なんで不景気かと言われると，企業の投資が減ったから．じゃ，どうして投資が減るのかと言えば，景気がよくなりそうもないから，としか言いようがない．

Ｑ；よくデフレ不況と言っているけど，デフレってのは物価の下落だろ．どうして物価がもっと下がらないんだろう．円高差益の還元と言えば，まず物価に反映すべきだよね．規制緩和で差益が還元されたり，物価がちゃんと下がるんだろうか．

Ｒ；消費者物価が下がるのはなかなかですよ．不況の解釈と言うか，説明もいろいろ出ていますが，どれと言って特に間違ったものはないんです．ただね，分かっていて言ってないんじゃないかと思われることがあるんですよ．それは，円高の還元にも言えることなんですが，要するに今の日本のいろんな市場ってのは，寡占的な市場ですよね．つまり，だいたいどんな製品や商品でも幾つかの大手企業があって，その下にわっと小さいのがいっぱいあるでしょ．ビールや自動車みたいに小さいのが全然ないのもあるけど．これをオリゴポリーと言うんです．どちらにしても，そういうマーケットでは「価格競争」というのは成立しにくいんです．もともとシェア競争していたんです．それも，デザインとかブランドとか広告なんかの「非価格競争」だったんですよね．全国ネットのサービス網なんてのが売りものだった．そういう寡占の状態では，価格を下げると確実に競争相手もシェアを守るために追随しますから，結果としてはシェアは変わらないのに，産業全体として受け取る売上が減ってしまうことになります．

Ｑ；横並び，睨み合いだね．

Ｐ；そういうのが，Ｒくんところの商売やうちの新聞には最適の状態って訳だ．

Ｒ；まったくそうです．専門的に言えば，関連業界も含めて「相互依存関係」が成立します．とにかく値段を下げたら売れるんじゃ，ぼくらの商売は上がったりなんです．だけど，こういう寡占の状態ってのが，消費者にとってまずいかと言うと，必ずしもそうではない．値上げの時も同じ見方をしますから，なかなか簡単に上げられない．

Ｑ；功罪相半ば，になるの．役に立たない理論じゃないか．

Ｒ；いや，問題は，その特定の市場の内部以外の要因で需要が過熱すると，これはもう一斉に値上げする．寡占企業のプライス・リーダー・シップと言われているんですが，暗黙のカルテルになってしまうんです．熾烈にシェア競争をしているところに，注文がわっと来ると，値上げだけで済まなくて，新商品発表やデザインの変更，余計な機能を一杯つけてちょっとでも差異を強調するとか，複雑な過当競争になる．当然，設備投資意欲も高まります．零細な業者ばかりで構成されたマーケットじゃないですから，製造能力や資金力の制約から自然に出荷量が限界になるってことがない．そうすると，また市場要因以外のことで需要が減退したりすると，もう生産過剰，在庫過剰になってしまんです．それに，こういう市場は，理論的な競争市場での均衡を上回る，言

わば「管理された価格」，つまりうまく行ってる時は超過利潤が含まれた価格と言う意味ですが，そんな価格に慣らされてしまっているんですね．大企業の予算とか組織なんかが，もうそれを前提にして成り立ってしまっている．だから，需要が減退した時には，リストラとかコスト・カットで対抗しようとする．日本では，下請けを泣かそうとすることになります．寡占的市場における「屈折需要曲線」の応用で，今の不景気が分析できるという訳です．紳士服の小売みたいなマーケットなどは別ですが，もう日本のほとんどの生産財や大量生産的な商品は寡占化されている．おまけに円高ですから，無理に輸出を増やしてもロクなことはない．ケインズ主義的な需要刺激政策で景気がすぐに回復するとは思えませんね．

Ｐ；うーん，何かうまく説明できているようだが，ちょっとそれは「後知恵」じゃないかな．それに，寡占とか独占，あるいは産業集中ってのはレーニンだって知ってたことだ．現代の経済学がその解答を持っていないってことはないと思うんだけど．

Ｑ；そうそう．だいたいＲはですね，そこいらの本を読んでいて，これは使えるって思うとやたらとあちこちから強引によいとこ取りして，勝手な総合理論にしちゃうんですよ．我田引水型の博覧強記シンドロームじゃないかな，そういうのは．

Ｒ；いいじゃないですか，酒の席の話ですから．

Ｐ；そう言うこと．だけど，Ｒくんの寡占理論で言うと，資本主義の限界なんかすぐに来るみたいなことにならないかい．それぞれのマーケットってのはそんなに大きくない．今では，統計の技術も進んでるし，コンピュータもあるから，マルクスやレーニンの時代とは訳が違うだろ．潜在的な需要だって読めてしまうんだから，そんなに過剰に設備投資したり，生産を上げるとは考えられないよ．

Ｒ；そこが不思議ですよ．だから面白いと言えば語弊がありますが，サムエルソンだって，「事業がやりがいのあることであるという理由の一つは，不完全な情報をもとにして最善の推測をしなければならないという点である」と言ってます．市場の情報は不完全，企業の行動にはいろんな制約や規制があるのに，経営者の思考パターンだけは自由競争ってとこじゃないでしょうか．

Ｑ；それじゃまるで競馬だね．事業ってのはゲームみたいなものかな．

Ｐ；特にアメリカはね．ウェーバーは，アメリカの現代の，つまりウェーバーの時代のってことだが，事業家はスポーツのように金儲けを考えていると指摘したことがあるよ．

Ｒ；その通りです．ウェーバーは，企業家の資質として，「醒めた自己抑制」，「明晰な観察力と実行力」，「決然とした，顕著な倫理的資質」が必要だと考えたんですよ．それらがなければ，顧客と労働者から必要な信頼を得ることができない，とまで言ってます．びっくりしますよね．そんな立派な人なら，事業なんかしなくてもいいですよ．ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を書いたのは，1905年ですから，その時代のアメリカは，ヨーロッパなんか眼中にない高度経済成長で，鉄道投機や乗っ取り，大企業の熾烈な闘いと拡大，好況と不況のサイクルなど，まるで純粋資本主義だった．もし，マルクスが19世紀のイギリスじゃなくて，アメリカをモデルにしていたら理論的に随分息の永い『資本論』が書けたでしょうね．

Ｐ；いや，そのへんもウェーバーはちゃんと洞察していたと思うよ．今で言う「移民国家」論の本質を見抜いていた．「人は生地を離れると苛酷な搾取に耐えられる」とか，アメリカに渡った移民達は故国の伝統主義とは無縁の教育を受けるために，資本主義がプロテスタンティズムとは無関係に発達することを言ってるね．

Ｑ；ちょっと前でしたが，アメリカ型の資本主義とか，ヨーロッパ型，日本型なんて議論がありまし

たよね．

R；あったあった．欧米型を，英米型とドイツ型に分けたりするのもありましたね．しかし，ウェーバー，レーニン，ちょっと後でシュンペーター，ケインズとくると，ほとんど同時代人ですけど，一国の内部の寡占的な市場がどんな不具合をもたらすかをレーニンやウェーバーが知っていたかどうかと言うとちょっと疑問ですよ．アメリカでも大恐慌以後に気がついたけれど，あそこの市場ルールや企業モラルからは積極的に解決しようという機運はないでしょう．アメリカの経済学者は危機的な状況に対しては，積極的に団結して発言もするし，その知的影響力を行使しようとしますけれど，内部的な矛盾があっても全体としてはうまく行っているなら，ほっておこうみたいなところがありますから．

P；そうだね．日本の審議会制度とは違うんだろう．なんと言っても，大統領の権限と４年の任期は大きな意味を持っているよね．

R；そうです．中央銀行にあたる連邦準備制度理事会の理事の任期は，なんと14年ですから．政策のスタンスは日銀の総裁とはまったく違うかも知れません．そんな国でも，寡占的市場の矛盾と言うか，その寡占的な状態が市場の機能を封じてしまうということには有効な手が打てないでいるんです．

Q；独占禁止法ってのは聞いたことがあるが，寡占禁止法ってのはないもんね．

R；変な話ですが，完全独占と言うのは，定義的には，その産業そのものの大きさによって独占が制約されますから，サービス面の効率低下や変な価格操作は困るとしても，社会的な資源のロスは意外と少なくしてくれるかも知れないですよ．自由競争が，価格やサービス，それから企業の成長にはプラスになるのは誰でも分かりますけど，全体としてロスや不効率がないかと言えば，実はそんな保証はないですよね．理論的にも証明されているんですが，実感としても，企業が市場にいつでも参入，撤退できると言うのは潰れるところはどんどん潰れるってことになる．そういうことが端的にあらわになるのが，寡占です．それが成立するのは当然「大企業体制」と言うことになりますから，費用が高くついて新規の市場参入がなかなかできないんです．だから，当然ですけど市場原理が機能しにくい．それに，この体制は，言わばインフレ好みなんです．全体としてのインフレに乗じて値上げがしやすいもんだから，それを加速させるおそれがあります．つまり，それを逆に見ると，浪費というか，冗費的な要素を抱え込んでいるんですよ．僅かの差異を強調した商品を供給しますから，パッケージや追加的なサービスなどで必然的にムダが出る．しかも，さっきも言いましたが，不況対抗力としては弱いんです．これが，言わば日本的な寡占には集中的に出て来るんです．経済学の常識では，経営資源が遊んでいる時にケインズ的な需要刺激をすると，「乗数効果」が働くことになっているんですが，もともと寡占的な大企業がそういう資源を抱え込んでいますから，社会的には遊休資本や余剰労働力があるように見えても，公共投資という政府支出が玉突きで拡大しなくて，企業貯蓄の増加，借金があるとその返済というように，乗数効果の減殺要因になってしまうんです．

Q；企業内失業か．景気が良くなってもすぐに雇用が増えないってことかな．

R；そうそう．過熱するまでね．それに，そういう遊休資源を抱えていると，景気の上昇がすぐに所得の上昇にはならないんです．だけど，大企業体制のせいで不景気がなかなか治らない，なんてことは誰も言いたくないし，言っても始まらないでしょ．

P；なるほど，こんどはよく分かった．しかし，Ｒくんよ，それは出口のない議論じゃないかい．出口ってのは，つまり，ではどうしたらいいんだ，ってことだけど．独占というのは経験的にもまずいよね．市場競争もどうやら理念的でしかなくて，寡占化すると，これは現実的にもどうにもならないことが分かってしまう．じゃ，どうすればいいの．と言うよりも，さっきから不思議に思うんだが，それではここまで産業が発展して来たことは説明つかないじゃないか．

R；ええ，寡占理論は，そこに至ったことを説明できません．個別の企業やそれぞれの産業は，一緒に大きくなった訳じゃないですから，それぞれ成長サイクルは異なります．寡占的企業にも成長の余地はありますし，費用と言うか，コストとしての障害は長期的にしか分かりません．それが分かるまではスケール・メリットが追求できますから．

Q；実際にはいろんなケースがあるし，企業もそれぞれ違うってことか．

R；でも，本質的には同じことでしょ．企業は，とにかく儲けを再投資して，資本設備を充実するか，それとも，同業の小規模な会社や経営に行き詰まった会社の設備や工場を買収して，大きくなるしかないでしょう．

Q；あれっ．それはマルクスの例の言葉じゃないか．「蓄積せよ．それが使命だ」だったっけ．

R；いや，その面ではマルクスは別に間違っていないですよ．体系的にはともかく，今でも彼の洞察が有効なことって沢山ありますよ．

P；じゃ，独占を禁止された寡占的な企業は成長を止めるのかい．

R；理論的にはそうです．後は，繰り返しみたいなもので，シェア競争の舞台が国際的なマーケットになるのか，それとも，蓄積した資本を他の産業に投入する，特に寡占化が進んでいない市場に進出することになります．要するに，コングロマリットになろうとするしかないです．日本では，60年代にも少しそういうのがありましたでしょ．あの頃は，ダイヤモンド経営なんてのか流行語になってたけど，オイル・ショックで潰れてしまった．それでもまた，80年代も，経営の多角化，複合化ってことで，結局はサービス業なんかに進出した大手が多かったですよね．今の不況でみんな見直し，つまりリストラをやっているんです．

Q；なんか，雑駁な話だな．自民党政権も割りとアッケなく潰れたけれど，資本主義もまるでもう駄目みたいじゃないか．

P；いや，そんなことはないだろう．Ｒくんが言ったのは，あくまで寡占的な市場と企業の話でしかないよ．資本主義はそんなに簡単には潰れないさ．アメリカだって一足早く景気を回復させているんじゃないか．イギリスやカナダもそんなに悪くないって話だ．今しんどいのは，日本とドイツじゃないか．もっとも，京大の佐伯啓思あたりは，資本主義の成長にとってのフロンティアがなくなって来たとか，アメリカニズムが終焉したとか言ってるけれど．これはまた違った観点だろうな．問題は日本だろ．今の細川政権で景気の回復ができるかどうか．

Q；Ｒの話じゃ，ムリみたいなことになるね．

R；一面では，そうですね．例えば，規制緩和なんて言っているけれど，あれは，寡占的な大企業にほかの分野への進出ができるようにしてあげますから，頑張って下さいって言う意味もあるんです．Ｑさんは不思議そうな顔をしているけれど，だいたい中小や零細にプラスになるはずがないんですよ．電話事業とかエネルギー事業などでもそうなんだけど，新規に参入するのは大変なコストがかかる．余程の資本を準備しなきゃならない．ビールの製造や酒類の販売の規制を解いてもいいけど，そんなことで売上が増える訳がないでしょう．ただ，大手がそういう異分野に乗り出すのは，確かに景気を刺激します．蓄積された資本を設備投資に回すことになって，それが乗数効果を生めばうまく行くし，新規の分野に進出すれば，またそこで一定の期間は加速度原理が働きますから．

Ｐ；佐伯のフロンティア論で言えばどうなるのかな．新規の技術開発によるイノベーションってのは資本主義を持続させるんじゃないか．

Ｒ；ぼくも読みましたよ．『「欲望」としての資本主義』とか『アメリカニズムの終焉』ってのでしょ．特に目新しい視点じゃないですよね．資本主義とフロンティアの関係としては，アメリカの歴史家Ｗ・Ｐ・ウエッブが『グレイト・フロンティア』を書いたのは1952年ですから．アメリカニズムについては，アドルフ・ローやデビット・リースマン，それからガルブレイスの指摘の方がおもしろい．古くはグラムシが指摘したことが，今流行のレギュラシオン学派の下敷きになっていますね．

Ｐ；それでも，技術的なイノベーションは大きい効果があるんじゃないか．

Ｒ；ちょっと懐疑的になっているんですが，確かに，シュンペーターが指摘したように，それが企業家精神と結合すれば，効果はあるでしょうね．もっとも，その企業家精神そのものが衰退すると，彼は予見しているんですが．ただですね，今ではそれは寡占的な市場の睨み合いに対する攪乱要因みたいなもので，もっと根本的な革新が起きたらどうなるのか，と言うことを考えておかなくてはならないかも知れないですよ．

Ｑ；と言うと，どんなことかな．ちょっとイメージが涌かないんだけど．

Ｒ；例えばね，ぼくは嫌いだから持っていないんですが，携帯電話とか無線通信の応用とかが，もう具体的にあるでしょう．もう少しそれが進歩と言うか，開発されると，今そこいら中に張り巡らされた電話回線なんてのがいらなくなるかも知れないですよね．電柱も要らない．そんなことになると，遠距離はどうか知りませんが，とりあえず市内の電話線とかケーブルなんて言う資産が無価値になってしまうかも知れません．ドスンとゼロになる．つまり，鉄道とか自動車が普及して，あっという間に，日本なら人力車がなくなるとか，アメリカでは駅馬車がなくなるとかの変化ですね．そういう革新が迫って来ているような気がするんですが．そうなると，これは激震ですよね．雇用形態とか失業率の問題じゃなくて，ＮＴＴが倒産するとか，電線メーカーがおかしくなるとか，どんどんマイナスの影響も波及する．もち論，プラス面も当然大規模に出て来るかも知れません．

Ｐ；ふーん．コンドラチェフの波動か．でも，それは西欧近代型じゃないかな．発想が．

Ｒ；いや，「創造的破壊」って言うのはそういうことでしょう．それに，フロンティアは，多分人間が自分で作るんですよ．市場が万能じゃないように，ぼくは決して技術が万能だとは思わないんですが，必要は発明の母でしょ．そういう根本的なイノベーションを待ち望んでいる人達ってのはものすごく多いんじゃないかな．中国とか，ロシア，それからインド．そういうところが経済的なテイク・オフをするのに，従来と同じことをしていたらとんでもないことになるじゃないですか．ただ，それを抑止しようとする既成の勢力，つまり現在の大資本，国際的な多国籍企業が一方ではいますから，そういう連中にとっては，そんなことは起こってくれない方がいいことになる．

Ｐ；おもしろい発想だけど，そこまで考える必要ってないんじゃないの．経済学的な理論でどう説明すればよいのか見当がつかないけれど，歴史が少しづつ変化して繰り返すとすると，今の不況は世界的にも相当長引くような気がする．かつての大恐慌もルーズベルトやケインズが解決したと言うよりも，結局は世界大戦が消化しただろ．それよりも不況に一番早く，適切かどうかはともかく，うまく対応したのはナチス・ドイツだった．日本の国家総動員体制は，そのエピゴーネンでしかない．逆の影響がスターリニズムを生んだし，カッコ付きの「社会主義」，つまり国家社

会主義とか一国社会主義の方が先行した．そのせいじゃないが，アメリカの資本主義も公然と市場経済に国家が介入することになったんだよね．

Ｒ；そうです．ポランニーも世界恐慌がスターリンの独裁を生み出した，と指摘しています．

Ｑ；そうすると，またもやそんな危機が来るんですか．

Ｐ；いや，単純に繰り返すとは思いたくないさ．もっとも，小さい，そういう芽がない訳じゃないけれど，それよりも，資本主義対社会主義という，二項対立的な問題の立て方がそもそもおかしいと思う．分かりやす過ぎるんだよ．大衆受けしてしまうと言うか，最初からそれを意識しているんじゃないか．だから，自由主義と資本主義を単純に同一視することにもなってしまうんだけど，これもおかしい．マルクスがさ，当時危険人物として国際的にどれ程有名だったか知らないけれど，彼がアメリカの一流の新聞に寄稿していたのは事実だし，それも一つや二つじゃないだろ．その頃のアメリカはヨーロッパ資本のおかげで高度成長していたんじゃなかったのかい．今の中国の沿岸部の経済成長も同じことだろ．

Ｒ；ええ，アメリカが債務国から対外債権大国になったのは，第１次世界大戦の後，というよりそのおかげですよ．反共思想が火を吹いたのは，「赤狩り」と言われたマッカーシー旋風ですが，これももとはと言えば，人気を気にした上院議員が思いつきで新聞記者にしゃべったことが始まりですから，アメリカが最初から反共国家だった訳じゃないです．

Ｐ；だけど，冷戦構造が戦後の世界を規定したのは間違いない事実だった．そう言う，妙な対立と提携関係が長く続くと，その影響と言うのは深く人々の考えや行動を規定してしまうんじゃないかな．それが，実際は意味のないイデオロギーを形成してしまう．戦わない軍隊とか使えない兵器が山のようにあるし，もっとおかしなことに，そういう冷戦構造が壊れると，「保守」や「革新」ってのはなんだったんだろう，ってことになっている．

Ｑ；うちはずっと革新市長なんですが，実際やっていることは他所と変わらない．ものによっては保守派よりひどいこともありますよ．

Ｐ；そうだね．ぼくが思うのは，そういう分かりやすい対立が逆に人々をとんでもなくシニカルにしているんじゃないかな．また，それぞれの陣営内部では，創造性とか多様性を奪う画一化がとめどなく進むような気がするんだよ．「地方分権」が必要だと言う議論の一方では，そんなことになってとんでもない責任が自治体に被せられることにビビってしまっているだろ．

Ｑ；それは言えます．だいたい工夫とか努力しませんよ．しなくていいと言うより，それをさせないような力が働いているみたい．今年は米が不作でしょ，全国的に．ところが，雨の多い年はどうするとか，風がきつい時はどうするとか，ちゃんと昔からのやり方もあるし，いろんな工夫ができるらしいんですよ．そうしている農家は少ないけど，そんなに出来が悪い訳じゃないんですよ．たんぼに出て，一所懸命やっている人を回りが馬鹿にするんですよね．そういう目にへこたれない農家だけはこんな年でもうまく行ってる．

Ｒ；うまくやっても報われないシステムになっちゃってますからね．努力して成果を得ているのに，結果だけ見て，妬んだりする．つまり，これが自由主義の取り違えで．

Ｑ；ごめん，ごめん．もう行かないと，電車がなくなる．この続きはまた来月でも．

Ｒ；やっと，おもしろいところに来たのに．早く別荘を建てましょうよ．ゆっくり考えられますよ．

Ｑ；君は独身だから気楽なことが言えるけど，そうはなかなか行かないよ．済みません，お先に失礼します．

（以上，1993.10.28.）

BORDER／LINE 9

平野　啓

1. これまで、鬱病、不安神経症について、諸関係への依存と反発の矛盾という一契機が伏在していることをみてきた。。精神病については、詳しくは展開しなかったので、あらためて考察してみる。フロイトは、精神病発病の条件として、生活課題に自我が耐えられなくなった時か、エスの力が増大した時を想定した。即ち社会諸関係の強制に個人が耐えられない場合を想定している。しかし生産諸関係の物神性に個人が囚われていれば、その抑圧的諸関係に必然的に伴う反対の衝動は、物神性の意識の内部に取り込まれて、物神性の意識の外皮が成長し、その内部で矛盾が解決される。その解決とは、諸関係を批判するのは「私」ではなく「他者」であると言明できるように矛盾を無意識的に加工して意識形態化することによってであり、かくして「私」にとっては実際そのような「他者」が意識されもする。その他者は、「私」の肉体に入り込み、命令する「霊」だったり、「私」の行為を批判する幻の声（ 幻聴）だったり、「私」を抹殺しようとする世間、狐や小動物が出たり入ったりする病室だったりする。

中学校二年の男子が、一週間ほど続く痙攣発作を主訴として来院した。彼は、2-3 カ月前から霊が入り込むと言った。その霊は頭から入ってきて、彼の身体を思うように動かして、やがて下の方から抜けていく。霊が入り込む頻度は次第に増してきたが、彼が痙攣をおこしたりすると抜けていく。彼の通う塾の教師も霊を信じているし、彼の友人も信じている。母親も彼の言うことを信じて、来院の一日前に高名な神社に、霊の御祓にかれを連れていった。

彼は小学生の時から、交差点を通ることが出来なかった。交差点に差しかかると強い不安感に襲われた。しかし車で急いで通り過ぎるのには耐えることができた。その不安は今でも有るが、彼にとっては霊の存在の方がつらかった。彼は小学生の時から成績優秀で、その他にピアノの家庭教師につき、毎日スイミング・スクールに通っていた。特に水泳では、県で10番目の速さを誇っていた。しかし彼のプライドを傷つけたのは、去年県大会でライバルに負けたこと、それに追い打ちをかけるようにピアノ・コンクールと発表会で大変なミスをしてしまったことである。彼は、将来、チャゲ&アスカのようなミュージシャンになることを夢みていた。ピアノ教師は、そのためには高校は普通高校でいいが、音楽大学に入ることを勧めていた。彼はその夢に賭けていたが、この夏の県の水泳大会での雪辱を果たすことも忘れることはできなかった。そのために彼の生活は極めて余裕のないものになっていた。付き添ってきた母親は、私の期待が大きすぎたのでしょうかと言ったが、しかし、彼が示す成功を「当然かっこいい」とも付け加えた。反面、サラリーマンである彼の父親は、彼と母親にとって「下品」な存在だった。「下品な中年」と彼はいう。

彼に、少し生活に余裕がないのでは、と示唆しても彼は、「そんなことはない。これが習慣だから苦にはならない。今年の水泳大会までは頑張る」と主張し続けた。しかし、彼が昨年暮れに、水泳の特訓のあと水泳をやめたいと漏らしていたこと、ピアノ発表会のあとで次第に体調が崩れていったこと等の「小さな証拠」は、彼の生活のどこかに無理があることを示していた。話し合いは平行線に終わり、とりあえず精神安定剤の服薬で様子をみることになった。彼によれば霊は自分の力でコントロールすることができるが、それには痙攣を要するので皆を心配させることになるからその方法は用いたくないのである。

二週間後に診察した時、妄想は軽快していた。彼は臨界点に達していた戦線拡張の路線を一時放棄し、戦線の縮小を決めたという。

精神病では、「現実の一片が無視される」と、フロイトはいった。ラカンもこの点に注目して、自我の基本的機能は、この「無視」にあるという。実際精神病者が、彼の現実を認識することは困難であるばかりか不可能とさえみえる。白昼夢は意志で終わらせることができるが、精神病の妄想や幻覚は意志のコントロールを受けつけない。妄想の機能が、社会関係の諸矛盾を生き抜こうする個人が、その諸矛盾を無意識に自分から隠蔽して既存の諸関係を生きることを正当化する点にある以上、意志は妄想を支配できない。

それでは夢の機能は何だろうか。フロイトは、夢は睡眠の守護神であるという意味のことをいっている。覚醒時における妄想・幻覚の機能が諸関係の正当化という一面をもっていることから類推すればフロイトの主張も理解できるだろう。だが一方でフロイトは、夢の願望充足的な点を強調している。この主張では不安に満ちた夢や、大きな災害のあとで繰り返しその災害を夢にみるという現実を説明できず、フロイトはこのような性格の夢の解明を巡って晩年まで苦しむことになる。夢が睡眠時の幻覚であるとするなら、フロイトとは別の角度で、不安・恐怖夢の説明が可能となる。即ち、夢は睡眠への努力と、睡眠に反対する衝動の両面から支えられるという奇妙な主張は、睡眠が現存の諸関係の維持という側面をもつことを思い起こすなら、合理的な主張となろう。

精神病の発病時、患者は極度に眠ることをおそれることがある。彼は寝食を忘れて、かすかに残った自己意識にしがみつく。彼は全力をあげて恐怖から逃走しようと試み、夜中に海辺にいったり、常識では考えられない距離の山道を徘徊したりする。そしてその山や海は、赤く燃えたり、大きなうなりを発したりするのだ。こうした患者へのアプローチは善意の「インフォームド・コンセント」のレベルでは成立しないことがある。身体医学的にも緊急の処置を必要とするのに患者はただ「薬はあした飲みます」「点滴は必要ないです」「どこも悪いところはありません」と淡々と告げるのみで徒に時間が過ぎていく。

要するに自己意識の維持を破滅させる「他者」（ それが睡眠であれ、幻覚であれ、医師であれ、薬であれ）に侵害されることを極度に恐れる。最近も、こうした女性の患者に薬をのんでもらうために半日を要した。もちろん他の患者は待機してもらうしかない。

商売あがったりである。入院となると又大変で、ある時は、真夏の炎天下の病院の玄関前で押し問答となり、9 時から始めて3 時まで説得したことがある。その時は「保安処分」反対の団体が患者を連れてきた。言わなくても苦労はわかってもらえるだろう。

中井　久夫は、精神病の発病過程の転導論（ 発病の回避）で有名だが、彼によれば、上記の時期は「焦慮の時期」の次にくる一番苦しい時期である。焦慮の時期は、いわば努力すればするほど落ちていく「蟻地獄」の時期である。だが中井は、発病の過程論の中で、精神病院がいかに社会的に知覚されているか、その知覚がいかに患者の葛藤を強化するかを見ていない。現在の状況では精神病院は依然として恐怖の「他者」である。中井は精神病院の改革の運動に傍観者的態度をとりながらも一見洗練された精神療法論を展開したがその落とし穴は足元にあったといえる。依然として「われわれの対決すべき全現実は精神病院にある」（ バザーリア）のだ。

2. ところで、上記の幻覚や妄想状態の記述は、いわゆる精神分裂病を念頭においている。

実際には、ヒステリー性の幻覚、アルコールや覚醒剤乱用による幻覚ー妄想状態、鬱病における妄想、痴呆における幻覚、および大きな手術後や急に体内・体外環境が変わったために起こる意識障害に伴う幻覚（センモウという）などが見られる。これらを同列に扱うことはできないが、共通する軸はないだろうか?

アルコール中毒の患者が交通事故や肝障害などで緊急入院したあと、数日おいて幻視（主に小動物や虫）、失見当識（時間・人物・場所に関する意識がなくなる）、不眠、自律神経障害（発汗、発熱、等）を起こすことがある。この状態はアルコール離脱センモウといわれ総合病院では比較的ポピュラーになっている。又心筋梗塞や脳梗塞で倒れ緊急手術をした患者の一部も術後同様の症状を示す（術後センモウという）。術後センモウは、老人や、手術に心の用意ができていない患者に多いようだが、睡眠を確保し、電解質のアンバランスや栄養障害を是正する全身管理と早期離床によって比較的短期間に消滅する。こうした場合は脳の機能的障害や身体的拘束に基づく認知能力の低下（身体は運動しなければ外界を把握できない）を計算にいれるべきだろう。いわば情報処理システムの故障である。しかしこの「故障」は、異常な精神現象の生理的前提であって、その現象の生態学的意味を説明しない。生物学的精神医学はこの二者をよく混同する。

この事態を総合による抽象の一時的障害という角度から説明できないだろうか。その抽象の一時的障害によって、意識の幅はいわば薄明を彷徨うように狭くそして鋭くなり、他者（人も、人の作った自然= たとえば病室も）は抽象されずに彼に無縁な威嚇的実体として彼を襲う。

このオーリッドで、早くも目覚める者はただ、殿と私のみ。
この静寂の中で、なにか物音でも聞かれましたか?
一夜のうちに、われわれの願いがかない、風の吹く気配でも?
しかし、ものみなすべては、まだ、眠りの最中。
出陣を待つ兵士たち、風、そして海の神ネプチューヌも。
（ラシーヌ　イフィジェニー　第一幕）

センモウが長く続いた、甲状腺機能低下症の初老期の女性がいたが、彼女の場合、付添いの嫁との仲がもともと悪かった。嫁・姑の間は古くから、悪いものだと相場はきまっているが、彼女たちの場合それがひどかった。双方からお互いの悪口を聞かされてうんざりしていた。しかし付添いを専門の付添い婦さんに代え、若い頃親しんだ糸紡ぎの仕事を病室で始めてからセンモウは軽快した。こうしたケースを考えるとセンモウを単に脳の機能障害という一点から説明するのは難しい。身体の運動・他者との交流が、判断能力を改善したといえる。この意味ではセンモウも精神分裂病における妄想的他者の出現の根拠(=自己維持に逆らう敵対的諸関係の正当化への努力がもたらす矛盾の産物）と共通項をもつといえる。

アルコール依存者によく見られる嫉妬妄想や幻覚症は、意識が清明な時に慢性的に出現する点で上記のアルコール離脱センモウとは区別される。Feuerlin W（以降、引用はライフ・サイアンス社発行の「精神医学レビュー No 5.妄想　1992」による）　は、性的行動を断念することから妻への反感を持ち、その反感が嫉妬妄想として外在化するという。小

片　寛は、慢性的な被害妄想の理由として、単身で健康を害しての孤立した生活環境・天涯孤独であったアルコール患者の例をあげ、その妄想形成は自己防衛であると了解している。　苦痛な現実を直視するよりも妄想を形成して現実を乳白化した方が耐えやすいことがある。アルコールの代わりに妄想が自己維持の機能を果たすのだ。

覚醒剤精神病者の妄想については、福島　章が報告している。それによれば覚醒剤の薬理作用は、ドーパミン系の分裂病への同じ方向への異常に加えて、アドレナリン系の活性化や交感神経系の優位が想定され、そのことによって内外からの情報の入力量が飛躍的に増大して外界の感覚を一挙に拡大するのみならず、内的な不安・恐怖やコンプレックスに対する認知をも先鋭化する。こうした状態を過覚醒と呼ぶが、福島は、まずその状態から直接に発生する「不安状況反応」の一群と、精神分裂病の被動的・被害的妄想とは対照的な、積極的・誇大的な妄想と幻視体験を特徴とする幻覚・妄想状態を区別すべきであるという。前者は、当の患者が生きている生活状況や、その不安・恐怖や葛藤から発生的に了解できるが、後者は患者の積極的・能動的な存在様式を背後に有している点で、分裂病者の対人関係や人間存在の「被動的」「受動的」な様態への変容と対照的であるとする。福島の鑑定例では、自分が特殊な能力や使命をもち、透視・千里眼、念力、予知、感応能力を訴える例が引かれている。福島は、こうした傾向をもつ一群は精神分裂病とは対極の自我高揚があると指摘している。しかしこの見方は一面的ではなかろうか? 状況の不可視性は不安と恐怖を惹起するが、その恐怖は反転して思考の全能性への依存、即ち実践的に・媒介的には変更不能の状況に対する、直接的・無媒介的変更の要求になる。即ち彼は呪術師になる。だから「不安状況反応」と自我高揚はメダルの裏表であり、両者を引き離すことには無理がある。

福島の鑑定例は、炭鉱夫の息子として中学校から非行・窃盗・恐喝・傷害・強姦等を重ねてきた「社会の敵」「全くの反社会」「札付きの非行」即ちマルクスのいうところのプロレタリアートの一員である。プロレタリアートは、社会から解放されていると同じように社会の幻想から解放されており、彼の生活条件から必然的に、一切の幻想から解放される。

青春のすべては真実の声を聞かないままに死出の旅にでた。自分の中に充分なだけの熱狂がなくなったら、教えてくれ、外へ出て、どこに行ったら良い? 真実は永遠に続く死の苦しみだ。この世の真実は死だ。選ばなくちゃいけない。死ぬか嘘をつくか。俺はどうしても死ねなかった。一番良いのは町に出ることだった。つまり小さな自殺だ。　（セリーヌ　世の果てへの旅）

父は、彼は自分の空想癖を警戒していた。いつも隅っこで独り言をいっていた。あまりにひきずりこまれるのを恐れていた..心の中は煮えたぎっていたにちがいない。
（　同　　なしくずしの死）

それゆえに福島には、彼が「能動的」にみえるが、彼には患者の「なし崩しの死」への予感を感ずる感性が、おそらく無い。他方、精神分裂病においては患者は抑圧される部分

でありながら社会の幻想に巻き込まれる。この差が、福島の目には対照的に映ずる。

次に「思春期妄想症」といわれる例を紹介する。例えばある青年は、自分からいやな臭いが発散しており、そのために周囲の人々が不快となり忌避されると訴える。ある若い女性は自分の臭いはワキガのせいであるとして皮膚科で手術をうけるが、その後も臭いは持続して周囲に忌避されるという。又は自分の視線がきついために周囲が不愉快な思いとするという。船橋　龍彦・村上　靖彦によれば、その中核群は次のような特徴を持つ臨床単位であるとされる。

1. 自己の身体的異常のために周囲の他者に不快感を与えているという妄想的確信
2. 症状の発展に状況依存性がみられる。つまり「共同的人間関係」の場で最も顕著に症状が現れる。
3. 異常を除去するために執拗に身体的治療を要求する。
4. 思春期・青年期に発症し、単一症候的に経過する。発症には、思春期・青年期の危機的心性が、病像成因的および病像形成的に重要な役割を演ずる。
5. 病前性格は回避型性格（葛藤を予期させる状況を回避する行動パターンが優勢の性格とされる）、強迫的傾向もかなり認められる。

この単位をサブタイプ化すると、他者の反応という指標からみて、患者を避けるという消極的反応を示すもの（忌避妄想型）と、もっと積極的意思をもって患者を馬鹿にし軽蔑するという体験をするもの（排斥妄想型）に分けられる。又、例によっては自己の身体的異常だけを確信し（例えば、体に鉄線がある等）忌避妄想や排斥妄想はみられず他者の反応は主題化しないものもある（自己完結群）。

船橋らは、これらの病像についての研究をまとめているが、その主なものをあげる。

1. 植元らは、小心でおとなしい子が、他者のまなざしにさらされ、まなざしにおいて自己が律せられるという「受動的被圧倒的存在」、まなざされることを克服しうるうな「洞察性の乏しさ」を準備状態とし、自意識= 即ち反省意識のたかまる思春期に、他者への接近要求が強くなるのに、一方で他者（そして自己）を対象化するという矛盾を孕んだ緊張関係において（危機としての思春期状況）、自意識の発達が遅れる準備状態にある若者が、その洞察性の乏しさのゆえに、世界の相貌が脅威的となり、ここに発症状況が結実するという。
2. Waklter は、根底に「人間の出会いの障害された様態」をみる。すなわち出会いにおける真の「二人性」が障害され、役割が一方的に規定され、変更不能になっており、自我は変様したものとして体験される身体の中に閉じ込められ、この身体存在の優格性を放棄できない。人間同士の出会いにおける彼らの身体的現出は、彼らのSoseinそのものとなる。
3. Dietrich.H. は、共同体全体に美的関係における不快感を与えることを恐怖するといい、患者は彼を不安にする状況をさけるために社会からひきこもるという。
4. 青木らは、自分の容貌が醜いという「醜形恐怖」（青木らはこれを異形恐怖と呼ぶことを提唱している）を中心にして論じ、ここで問題となる身体的欠陥は、単に身体の一部の欠陥でなく、人格的な意味での「異形」であるという。ここでは他者の反応が主題化する定型群に比べ、他者との対決的姿勢が優勢である。患者は自己を他者に対し優越する者であると思う一方で、他者は自分を馬鹿にし軽蔑するものであると捉えられる。即ちこだわる身体をめぐって自己と他者は対決的緊張関係にある。しかし患者はその容姿のために人前に出られず、こんな自分は死んだ方がよいと思う。そこには現前として他者の目が存在する。
5. 渡辺らは、中核群と別に身体的妄想へのこだわりを中心とした群をセネストパチーとし、その患者は、自己の身体の変容に拘泥しながら、それ以上に自己の精神的不全感に悩むという。他者との間では、他人が大勢いると人格をそれらにとられるとか、周囲に抵抗力がないので、心を持っていかれると体験し、自己の身体の変容にこだわりながら、逆に、その身体において彼らは空虚を体験する。「空疎における凝集」と「凝集における空疎」の矛盾的共存という意味での「乖離」が基本的力動である。これは身体全体の病態であり、その限局化（凝集化）が、防衛機制として重要な役割をはたす。
6. 小出らは、患者にとっては、統合的全体としての人格が問題ではなく、個々ばらばらな部分的異物として体験される。したがって自己の内部には葛藤はなく、異物的な部分の矯正や除去に努力が集中するという。
7. 村上は、「不快な臭い」や「きつい目つき」はそれ自体彼らの身体の一部であるが、その不随意性のゆえに非自己化されたものである。それは他者によって対象化され異化された「対象ー自己」であり、彼らの「主体ー自己」（本心）とは分離している。この分離は、翻って、対象ー自己から切り離された主体ー自己の実体性を脆弱なものにする、という。

これらの研究をふまえて船橋らは自説を展開する。それによれば、鍵概念は出現する「他者の様態」であり、患者においては、他者は自己の身体的欠陥を映し出す「鏡」である。その意味で交換可能である。自己を評価する他者の妄想的側面（他者のノエシス的側面）は、その都度の個別的他者（ノエマ的他者）の存在を介して、自己に開示される。一方自己を評価する、他者のノエシス的側面は、自己の不快な身体的異常によっていつもあらかじめ規定されている。この自己と他者の閉じた円環が、思春期妄想症状の基本構造であるとする。そして精神分裂病では、妄想的他者(A) は(Lacanのいう大文字の他者）知られていないが、思春期妄想症では、その他者が個別的他者として知られている点が異なるという。前者では「私を構成する他者に対する私の優位の逆転」（自己の他者化）の事態があり、後者では「経験的・心理学的な自己（ノエマ的自己）の内部の分割」が問題となるという意味で区別されるべきであるとする。

以上の諸説をふまえて整理すると、患者が問題とするのは身体であり精神ではない。むしろ両者は分離されている。ここに問題の核心がある。患者は、社会関係を結ぶ他者との間で問題となるのは、自己の外面であり、自己の内面ではないと言い張ることによって自己の正当性を主張する。社会が私を排除するのは、私のせいではなく、私の単なる外皮であり私の人格のためではない。それはあたかも、粗悪な商品が告白して「私は市場で通用しない商品であるが、それはその商品の外観が悪いためであり、その使用価値によってではない」といいはるかのようである。

個人の諸属性を、その外観から判断しようとする見地は、商品・貨幣・資本の物神崇拝

から必然的に生まれる。物をより多く持つものはより多くの社会的力、即ち優れた個人的属性を有するようにみえるから尊敬される。物の所有は所有者の外観からしか判断できないから外観が第一となり、ブルジョア的偽善はここにおいて頂点に達する。「金持ちになろう、あるいは金持ちにみせよう」（ディドロー）。一方プロレタリアートは無所有であるから汚く、不快な臭いを発する存在である。成り上がろうとすれば、あるいはブルジョア市民社会でどうにかやっていこうとすれば自分の嫌な外観・嫌な臭い・自己の素性・自己の歴史を消さなければならない。清潔さは、19世紀以来ブルジョア道徳の規範であったし、今もそうである。それは身体の発する臭い、農民的なもの、非都会的なもの、自然なものを抹殺しようとする異常な衝動である。ブルジョア社会における身体と精神の二元論、外面と内面の二元論はここから生まれる。イデオローグたちはこの二元論を意識として措定はするが、その生成は物象を形成する社会成員の無意識的共同行為の産物だからその成員にとっては、この二元論はブルジョア市民社会における日常行為の矛盾の産物である。即ち無意識的な産物である。二元論を無意識の内に実行していれば社会関係における葛藤は無意識的にその二元論に加工されて意識形態となり、例えば身体に関する妄想が成立する。そして身体的欠陥に関する妄想が意志によるコントールを受け付けない根拠は、諸個人が物象の価値増殖衝動に意志を支配されていれば、その行為の産物は自分の意志のコントロール外にあるから。

船橋、そして彼の紹介する諸説は、この社会的・歴史的状況の抽象化に、その前提を見ることが出来る。だが船橋らはその抽象化された前提から患者の病態を説明しようとしているから、現象論・現象の解釈学に終わっている。とりわけ目立つのは現象学的・現存在分析的前提である。そこで簡単にフッサール・ハイデッカーに触れておきたい。

フッサールは「幾何学の起源」(1936)において、ガリレイとは異なった幾何学に関する反省を開始することが必要であるとして、幾何学の意味、しいては科学および科学史一般、世界史一般の意味を問い返すことが必要であるとする。ここにフッサールの問題意識の特徴が露になる。つまり幾何学の内容でなくて幾何学の意味が問題なのである。「幾何学の起源」には幾何学の内容とその限界には一切触れられていない。その代わりに幾何学の意味や科学一般の意味が問われている。しかし幾何学の意味を問うとしたら、その内容が問われるはずであるが、フッサールはその難問を不問に付す。たとえばヒルベルトの平面幾何学の公理主義に含まれるパラドックスはゲーデルにより暴露され、ある公理系の無矛盾性は、その公理系の内部では証明できないとされたのであるが、その場合、ゲーデルはヒルベルトの体系に内在することによってその結論を得た。。ところがフッサールは、こうした労苦をネグレクトして、科学の意味とは何かという問いをたてる。ヒルベルトの幾何学を知らずしてその意味は何かと問うようなものだ。問いの仕方が回答を不能にするように立てられていることにフッサールは無自覚である。

「幾何学的実在はその原的創設以来、われわれが確信するように、すべての人間、まずはあらゆる民族、あらゆる時代の現実的および潜在的数学者にとって接近可能な、独自な超時間的現存を、しかもそのあらゆる形態においてもっている... これはわれわれが認めるように理念的客観性である... この客観性はすべての科学的形象および諸科学自体を含め、しかもまたたとえば文芸的形象をも含む文化世界の精神的産物の全

体に固有なものである」（「幾何学の起源」青土社　264-265P）

これらの理念的客観性は、人間性の地平が、仲間との共同体の開かれた地平にあることによって保証される。

「人類とはおのおのの人間にとって、その［われわれ］という地平をなしており、正常なしかたで互いに十分理解しつつ語りあえる能力の共同体である」（同 268P）

更に、フッサールにとっては人間は「理性的動物」であり、その歴史は目的論的理性であってその理性は、民族や個別を越えた普遍的な性格をもつとされ、相対論的主張は退けられる。

「いまやわれわれは、理性の広くかつ深い問題地平、すなわちまだいかに原始的であっても、理性的動物であるあらゆる人間のうちで働いている同じ理性の問題地平の前に立っているのではないだろうか」（同 304P）
「数学の歴史的ないし認識論的本質を時間に縛られた人間存在の魔術的状況やその他の統覚様式の側から解明しようとする歴史主義は、まったく原理的に倒錯している... どのような型の事実性でも... すべての事実性と同様に、普遍人間的なものの本質的構成要素のなかに根ざしており、歴史性全体をつらぬく目的論的理性は、この根のなかでおのれを告げる」（同 304P）

フッサールの主張は、普遍理性が歴史の中で自己を開示していくという定式に要約できよう。フッサールは、数学における公理主義化をめざしたヒルベルトと同じゲッチンゲン大学哲学科で教授をしたが、そのヒルベルトも又普遍主義者であった。彼はこういったといわれる。

「われわれは、われわれの内に絶えず呼ぶ声を聞く ――ここに問題がある。その解を求めよ。純粋理性によって、解は見出されるであろう。なぜなら、数学には不可知は存在しないからである」

フッサールの登場するまでに、数学では、ヒルベルトらの形式主義と、ツエルメロの直観主義と、ラッセルの論理主義の三派が競い合う事態になっていた。フッサールはその中で意識しないにせよ、ヒルベルトの抽象主義・形式主義に加担することになっている。

更に広い文脈においては、彼の主張は一種のネオ・ヘーゲリアンとして「世界精神」の復活を告知するものであった。しかしヘーゲルにとっては、世界精神の体現者はナポレオンであり、その背後には勃興するブルジョア階級があった。ところがフッサールにとって理性の体現者は永遠の真理としての科学である。

「［このアプリオリの開示においてのみ］、あらゆる歴史的事実性、あらゆる歴史的環境、民族、時代、人間性を越えたアプリオリな科学が存在しうるのであり、このよう

にしてのみ、[永遠の真理] としての科学も登場することができる」(同 303P)

現在、科学物神は、ブルジョア的理性の頂点として解体の対象となっているが、フッサールは、まさに科学物神の崇拝者として登場したのだが、彼自身は、科学の具体的内容には踏み込んでいない。崇拝者は、神を分析はせず、ただその存在を崇めるのである。

さて、ハイデッカーは、「有と時」(河出書房　世界の大思想 28)において、この研究がフッサールの継承であると主張している。

「以下の諸研究は、エトムント・フッサールが置いた地盤の上でのみ可能となったのであり、彼の "論理研究" を以って現象学は突破口を開いて発現してきたのである。現の予備概念の諸解明は次のことを告示している。すなわちそれは、現象学に本質的なことは、" それが" 哲学の「傾向」[すなわち、一定の主義とか方向] として現実的であるということに、存するのではない、ということである。現実性よりも一層高くに可能性は立っている」(57P)

それでは現象学とは何か。「研究の現象学的方法」と題して彼は次のようにいう。

「現象学は諸現象についての学ということになるであろう。現象学の予備概念は、その両成分たる「現象」と「ロゴス」とに依って意味されているものの性格づけと両者から合成されたる名称の確定とに依って、明るみに取り出されるであろう」(45P)

第一の現象という概念について。

「 "現象" という言い現わしの意義として次の如きものが堅持されなければならない、すなわち、それ自身を= そのもの= 自身= に於いて= 示すもの、顕わなもの、と。」
(45P)

ここでいう現象という概念は、仮象、現れ、単なる現れという呼称で呼ばれるものと異なるが、この差異を明確にするためにロゴスの意義が境界づけられねばならない。ロゴスは、或るものをすなわち、それについて話がなされているところのものを、見えしめるが、それ故にロゴスは真でありまたは偽でありえる。しかしロゴスよりも一層根源的に「真」であるのは感覚であり、或るものを感覚的に認取することである。更に、最も純粋で最も根源的な意味で「真」であるのは、つまり発見的であって、覆蔽することがないのは、純粋に思惟スルコトつまり有るものとしての有るものの最も単純な有の・諸規定を端的に注視しつつ認取することである。こうして、ハイデッカーにしたがえば、ロゴスの機能は、

「或るものを端的に見えせしめるということに、すなわち有るものを認取せしめることに、存するがゆえに、ロゴスは理性を意味し得るのである。そして更にロゴスは話スコトという意義に於てのみならず、同時に話サレタモノつまり明示されたものとしての明示されたものという意義に於いて使用されており、而もこの明示されたものは、.

...根底に存する基体(従ってまた、主語) に他ならないがゆえに..根拠とか理由を意味するのである。そして最後に..関係とか比例という意義を得てくるのである」
(52 ―53P)

こうして現象学の意味が確定される。

「現象学という言い現しは、ギリシア語で言えば、次の如くに方式化される、すなわち諸現象ヲ話スコト、と。然るに[この場合] 話スとは顕ワニスルということである。そうだとすれば、現象学とは次のことをいう、すなわち、諸現象ヲ顕ワニスルコト、すなわちそれ自身を示すものを、それがそのもの自身からそれ自身を示すように、そのもの自身から見えしめることと。」(53P)
「現象学が "見えしめる" べきものは、一体何であるのか... それは... 差し当たってかつ大抵はまさしくそれ自身を示さないもの、而も差し当たってかつ大抵はそれ自身を示すものとは対照的に覆蔵されて[すなわち、隠されて] いるもの、併しそれと同時に、差し当たってかつ大抵はそれ自身を示すものに本質的に属しており、而も後者の意味と根拠を成すという仕方で属しているもの」(54P)

そしてその遂行方法は、

「解釈である、ということである。現有[を主題とするところ] の現象学に属するロゴスは、解釈スルコトという性格をもっており、解釈に依って... 現有の独自なる有・の・根本構造とが、告知されるのである。..現象学は... 解釈学であり」(56P)

その主題は、有である。有と有の諸構造は、いかなる規定性をも超越して存する。即ち有は、超越者(超範疇) である。現有の有の超越は、その内に最もラディカルな個体化の可能性と必然性が含まれているかぎり、或る一つの超越である。有を超越者として開示することは超越論的認識である。
それでは、有・現有とは何か。それを問う仕方はどのようにあるべきか。

「有の問いを仕上げることは次のことを意味する。すなわち、それは、或る有るもの ― 問いつつ有るもの ――をそれの有に関して徹底的に見透さしめる、ということである. .この有るもの、すなわち我々自身が各々それであり、而も就中問うという有・の可能性をもっているこの有るものを、我々は述語的に現有として捉えることにする」
(22-23P)

それに対して、諸学の探究は、諸々の事象領域を「探究の対象として」取り上げて最初に確定することを、素朴にして粗野な仕方で行っている。ここでは実証的研究という仕方で問うことの問い掛けられている事象それ自身へ関わるその仕方が動揺におちいる。この危機を克服するためには、或る一つの学の主題とされるすべての対象の根底に存する事象領域が「実証的研究」に先行するとともに、而も一切の実証的領域を導く理解へと、導く根本的諸概念を規定することが必要である、という。彼は諸学の危機の例証として、数学

における形式主義と直観主義の論争、相対性理論、生物学における機械論と生気論の論争を越えようとする傾向の目覚め、歴史学における文献史から問題史への移行の傾向、神学の基礎の解明、等をあげている。彼はフッサールと同様、諸学の内容に内在してその内的矛盾を明るみにだすという方法ではなく、諸学がとっている形式的前提、つまり実証的探究の仕方を問題化する。すると、ここで問題の領域が二分される。つまり諸学の研究の仕方を問題化することと、諸学を可能ならしめている現有、つまり人間を問題化することとの二つに分岐する。彼はこのプロブレマティークのうち、後者を探究することを選択するのだが、その結果、諸学は危機に陥っているとされながら、その具体的内容は批判されることはないから、このような批判は自分に無縁だとして自己の路を歩み続けることが許されるだろう。一方、彼は諸学は危機に陥っているとしながら、その「根本的諸概念」を問うという仕方で自己完結する。つまり実践的には、徹底的批判が、一切の古い諸要素の復活の承認に転化する。それはともかく、諸学の依拠する根本的諸概念はどこから生まれているのだろうか。それは日常生活に属する常識と解釈からである。

「事象領域をそれの根本構造に関して明るみにだすという仕事は、その内においてその事象領域それ自身が限界づけられているところの有の圏域、そういう有の圏域に関する学以前の［すなわち、日常生活に属する常識的な］経験と解釈とによって、一定の仕方で行われている。そのようにして［すなわち、学以前の経験と解釈とに依って］生じてきた「根本的諸概念」が、その事象領域の最初の具体的開示のための諸々の手引きとされているのである」(25P)

諸学が、日常生活の常識と解釈から生まれたとすれば、日常生活の批判を主題化すれば、その限界が問われよう。しかしここで彼はそのようには問題を立てない。諸々の学は、人間のとる諸々の態度として、この有るもの（人間）の有り方という［性格］をもっている。この有るものは、現有とされる。つまり、彼は、諸学を、人間の有り方と捉えるから、人間を主題化することによって、問題に対応しようというのである。ここでハイデッカーにおいて諸学が持つ意義は、ヘーゲルにおいて哲学のもつ意義と同等であることがわかる。ヘーゲルにおいて諸哲学は人間の自己産出の歴史的過程であり、その歴史的過程の内で人間は自己を展開し確証する。一方でヘーゲルとハイデッカーの差異は、前者が、諸哲学の内容を具体的に・歴史的に開示しているのに対し、後者は、諸学の内容の開示を捨象しているから、人間の有り方としての諸学を分析せずに、人間の有り方を追求するというパラドックス・二元論に陥ったことである。その結果彼は人間の特質性を自己反照としながらも、その反照の形態を自分の生み出した諸学との関係ではなく、自己自身との抽象的関係の内部で規定することになる。

「この有るものにとっては彼の有に於いてこの有自身が関心の的になっているということである」(27P)
「彼の有と共にかつ彼の有に依ってこの有が彼自身に開示されて有る」(28P)

つまり、人間は、有論的に有る。人間の自己関係のありかたの前提となる有それ自身は

「実存」とされる。すると人間の自己関係の仕方は二つしかない。自己自身であるか、ないかである。

「現有はそれ自身を常に、彼の実存から、すなわち彼自身で有るかそれとも自己自身で有るのでは無いかという彼自身の可能性から、理解している」(28P)

この自己関係の仕方は、彼自身の選択によるか、「陥った」か、「生い立った」かによる。結局どちらを選ぶかは決断の問題とされるが、その選択の結果を理解することは実存的理解と呼ばれる。他方、実存の諸構造の連関は実存性と呼ばれる。この諸構造を解明する分析論は、-実存論的理解という性格をもつ。ともあれ、ここで人間の自己関係は二種類しかないとしたのち、彼は人間の意味を問うて、それは自己自身を理解しつつある人間それ自身であるとする。

「現有の有の意味は....自己を理解しつつある現有それ自身である」(371P)

ここで彼は有・現有の存在論に、意味論的次元を導入している。つまりここで存在論が意味論に転化している。すると、自己関係の両義的有り方のうち、本来的有り方を選択することが意味をもつということになる。更に現有の根本的次元として時間性が導入され、本来的有り方の時間性が主題化する（時熟）。こうして人間の有の体制を明るみに取り出すことは、道程である。

「現有の・有・の体制を明るみに取り出すことは... 一つの道程にすぎないのである... 目標は、有・の問い一般を徹底的にしあげることである」(492P)

ここにハイデッカーの目的論が露になっており、ここでフッサールのいう目的論的理性が復活している。存在論が意味論に転化すれば、人間がその意味を問うて自己関係するということは、一種の倫理学になる。ところが他方で、現有は解釈されるにすぎないから、諸々の非本来的なありかたは事象の全領域で展開されるにまかされる。こうして、ラディカルな自己懐疑は、現存する一切の事象の追認・承認、最も非本来的・世俗的な自己と日常の承認に急変する。このように反省するとハイデッカーがナチに加担したのは偶然というより、彼の思想の必然的帰結であるように思われる。

ハイデッカーに依拠した現存在分析についてバザーリアは、患者の生のメッセージを際立たせるが、他方でこれを放置すると批判した。ハイデッカーの哲学からして当然受けるべき非難であろう。

フッサール・ハイデッカーの主張が妥当だったとすれば、諸学の危機は克服されているはずである。ところが実際には諸学の危機は克服されず反対に繁栄し、科学物神を形成している。彼らの主張に現実性がなかったという歴史的証明は、眼前にある。しかし彼らの問題提起は貴重であり、その問いは答えられていない。ハイデッカーが提起しながら、投げ出した箇所、つまり、諸学は日常生活に属する常識・解釈から生まれるという指摘を生かして、日常生活の変更という課題を選択する方向へ向かえば、諸学の基礎を解体し、こ

れを新たな日常生活の基礎の上で再編できるだろう。実際、人類学・心理学・精神医学・社会学・歴史学等の人文科学のみならず、自然科学の諸分野において更新がなされたのはオルタナティブな社会運動・女性運動・障害者解放運動等の前進と結びついている。

さてオスカー・ベッカーは、「数学的思考」(工作舎 1988)において、ハイデッカーに依拠しつつ、数学的思考の限界を探究している。彼によれば、数学的思考の限界は二重に規定される。第一に、数学自体の内部から生ずる、数学的推論法の限界。第二に、哲学的に・つまりハイデッカーのいう現有の時間的次元からみた数学的思考の限界性。

ベッカーの解答は二重になっている。つまり、ニュートン以来の科学の方法である「分析と総合」という、対象の分析的抽象という方法論上の限界に数学的思考の限界をみるのではなく、むしろその方法論は前提とされたままで一方でゲンツエン・アッカーマンの理論の検討から、数学的構成可能性という概念を、可付番的・枚挙可能なものへ制限するように数学的思考は自らを強いるとし、他方で、カント的な意味で人間は有限であるから無限を思考でき、人間の思考に異質な自然は、数学によって対称的姿で描写できるが、理解不能であると不可知論を正当化している。

> 単なる概念からは、あらかじめ漠然と与えられているものを解体することによって明瞭にするというだけの「分析的」判断しか育たない。われわれの知識は単に経験的なだけでも、あるいは ――数学的直観のごとく ――空間と時間の両形式における純粋直観に基づくのでもない「総合的」判断によってのみ拡張される。(201P)

ベッカーは、みられる通り「古典的」な分析と総合概念を前提とする。その上で今日の数学理論の特性を位置づける。

> アリストテレス以来の無限なるものの可能態的把握を人間に当てはめていること、同じくまたこのスタギラの人の抽象理論で数学的なものを人間に結びつけていることが見てとれる。またこれに劣らず、今日の数学の帰納的構成主義が同じ線上にあることを見逃してはならない。(203P)

この帰納主義においてはゲンツエンにみられる如く、

> ある帰結が無限に多くの他の帰結に、その複雑さにおいて勝るということが起こりうるから、超限順序数が必要であり、その総体の帰納的把握は超限帰納法によってのみ可能である。それゆえにゲンツエンは構成可能な超限数を必要としたし、彼の証明にはカントルの第一の「エプシロン数」までいたる第二の順序数でたしかに十分であった。しかし解析学または集合論でさえ、その無矛盾性の証明のためには、アッカーマンの検討により構成可能な形で準備されている第二類数のより大きな切片を必要とする。

このような、無限遡行を断ち切るには、数学的構成可能性という概念を可付番的・枚挙可能なものに自己制限する必要がある。他方、数学的思考の限界についての哲学的問題に

ついて彼はカント・ハイデッカーに依拠しつつ時間的存在たる人間にとって自然は異質であるとしつつ両義的解答をしている。

> われわれは過去のいかなる時より高いレベルで自然の異質性に行き当たる。この異質性は、われわれの日常生活的大きさの尺度から遠ざかれば遠ざかるほど増大するように思われる。しかしそこでこそ数学がわれわれの助けになってくれ。しかも直観というものをもはや必要としないその抽象的・形式的形態において援助してくれる。量子論におけるヒルベルトの無限次元「空間」という概念は、すでに相対性理論において多次元ミンコフスキー「空間ー時間ー連合」が基礎的役割を果たしていたと同様に、事態の解明に役立っている。(213P)

> 人間は、自己を歴史的自覚をもつ「実存的」存在にまで押し上げてくれた諸力に駆られて数学を推進しているのではなく、その抹殺しえぬ「従属実存的」自然とのつながりから、自然を、その理解不能な点そしてまさにそこにおいて数学的思考によって解読する、つまり自然をしてその固有の「結晶した」光において輝かしめる能力が人間に生じてくるのである。(217P)

> 自然は、それに驚異を抱いて接し、しかも理解は求めない視線とは出逢うものではあるが、(歴史的に) 経験されはせず、生活の途上でわが物にされるものでもない。しかしそれは特定の意味で「解明できる」ものである、つまり対称的に描写可能である ――もちろん感覚的に知覚される姿ではなく、思考上の形態(noeton eidos)としてであって、数学がその本質を基礎づける。(216P)

ベッカーの解答は両義的である。それは、直観が役立たない領域において、数学は事態の解明に役立っている(量子論等) としながらも、その根拠を示していない。ベッカーは、抽象する主体が人間にしかないと前提しているので、自らの解答の両義性がどこから生じたのかわからないのである。ベッカーは、数学が抽象であるというアリストテレスの規定に忠実であるが、現在では、抽象する主体は人間だけではないことが判明している。数学が、無意識的に、判断する主体を人間以外において、その判断を叙述していると解すれば、ベッカーの「数学的思考」の限界についての解答の限界を打破する可能性が開けよう。その意味では、「量子論理は論理である」とするピーター・ギビンスの示唆(「量子論理の限界」 産業図書 1992) は検討に値する。

それはともあれ、船橋らの自己と他者の関係規定を検証しておこう。思春期妄想症の患者にとって他者は自己の身体的欠陥を映し出す鏡である、とされるが、正常時においても他者は自己の鏡である。具体的な自己A が、社会的にB と関係することを通じて、総合による抽象が行われ、両者は、両極に分裂して形態規定され、A はB に連関することによって自らに連関し、かつA にとってはB は、その具体的姿のままで、人間の現象形態として意義をもつ。ここでは、ノエシス的他者とノエマ的他者の区別も、大文字の他者と、小文字の他者の区別も要らない。問題は、他者に連関することによって自己に推論する内容で

ある。その内容は社会関係の特質によって規定される。思春期妄想症で、自己に推論する内容が自己の身体的欠陥であるということは、その社会関係の特質が身体を捨象し・同時にその身体の捨象への抵抗であるという特質をもつことを物語っている。自己の身体への葛藤的推論がここにある。なぜ、社会関係の内容が身体を巡るものになるかについては市民社会における社会関係の特質として既に述べた。

> さまざまな分裂や対立のもとになってきたのは、空気・垢・糞便といったものをどう考えるかという。二つの異なるとらえかたであった。そこから、欲望のリズムをいかに扱い、欲望にまつわる香りをどう扱うか、相異なる二つの管理の仕方が生じてきた。そうして結局それらの分裂、対立の落ちつくところ、それが、いま私たちの生きている、悪臭のしない、無臭の生活環境なのである。
>
> （コルバン　「においの歴史」　新評論　1988）

一方、精神分裂病の場合における「自己の他者化」とは、社会関係の内容が身体の捨象とそれへの抵抗から一歩進んでA 全体の捨象とそれへの抵抗が行われている場合に、A 全体の捨象の面だけを規定したものである。抵抗の面を考慮できないということは社会関係の葛藤的内容を問えないということであり、ただ受動的に捨象に従う個人を想定しているということである。この想定はハイデッカーの哲学から直接的にでてくる。即ち、ラディカルな自己懐疑のうちでの、全く非本来的な自己の承認。こうした二元論から訣別するには、社会関係・そのラディカルな葛藤状況を生き抜こうとする具体的諸個人に内在する他はない。

「身の破滅に逆らって、自己を維持しようとする意識の狂熱」（ﾍｰｹﾞﾙ　精神現象学）

（一）ネップとは

前回、ネップの時期の再検討が必要であることを提起した。その準備として、まず、晩年のレーニンの協同組合論を取り上げよう。

ロシア革命の時代区分は通常次のようになされている。

１９１７年～１９１９年	プロレタリアート独裁の形成
１９１９年～１９２１年	戦時共産主義
１９２１年～１９２９年	ネップ（新経済政策）
１９２９年～１９３４年	農業集団化
１９３４年頃	スターリン体制（国家制社会主義）の成立
１９５４年	スターリン批判の開始
１９８５年～１９９２年	ペレストロイカとソ連邦の崩壊

１９１７年１０月（旧暦）のいわゆるボリシェヴィキによる政治権力の奪取は、その党の組織性と規律に支えられて、無血革命としてなされた。革命と反革命との衝突はその後にもちこされ、１９１９年、ロシア領に進軍していたチェコ軍の反乱を契機として、内戦と列強による干渉戦が始まる。

この内戦の時期に、ソ連の社会システムが形成された。そのシステムは、戦争遂行上の必要からある種の統制経済となり、経済は物々交換となり、食糧は不足分を農民からの徴発にたよっていた。このシステムは見ようによっては、商品経済と資本家階級を廃絶した共産主義のようであり、ボリシェヴィキ党もこれを共産主義のシステムであるかのように捉えたこともあった。

しかし、強制的な徴発にたよらねばならなかったシステムが長続きするはずがない。農村の不満を代弁して、クロンシュタットの要塞の水兵が反乱を起こしたとき、ボリシェヴィキ党は、強制徴発をやめ、食糧税に移行する措置（これがネップと呼ばれた）を採用し、戦時共産主義を自らの手で終わらせた。

戦時共産主義の時代には、小企業といえども国有化されていたので、ネップの時期になされねばならなかったことは、小企業の民営化と商品交換の復活であった。このネップの時期に、第一次世界大戦によって疲弊していたロシアの経済は復興し、戦前の水準を超えて成長していった。その過程で農工間の生産力の格差が急速に形成され、農工間の商取引が農民に不利となったため、農民は穀物を政府に売りたがらなくなり、政府は穀物の調達に苦労するようになる。２０年代後半になってはげしくなった穀物調達危機に対する対応として、スターリンは強制的手段にうったえた。この措置に対する農民の反対運動に直面して、スターリンはさらに一歩進めて、農業の集団化を強制的に実施した。こうして、ネップの時代は終わり、スターリン体制への道が開かれていった。

整理すれば、ネップとは、食糧の強制徴発から食糧税へ、全面的国有化から中小企業の民営化へ、物々交換から商品交換へ、という三つの点での転換であった。

（二）レーニンの協同組合論

ネップに転換して以降のソ連で社会主義をどのように建設していくか、晩年のレーニンの主要関心がこれであった。党や国家の官僚化に対する批判とともに提起されていたものが論文「協同組合について」であった。ネップのもとでの協同組合の意義についてレーニンは次のように述べている。

「じっさい、わが国で国家権力が労働者階級の手に握られた以上、すべての生産手段がこの国家権力のものとなった以上、われわれに残された任務は、まさしく、住民を協同組合に組織することだけである。協同組合への住民の組織化が最大限におこなわれている条件のもとでは、以前に、階級闘争や政治権力獲得のための闘争、その他が必要だと正当にも信じていた人々から、当然なことながらあざけられ、冷笑され、軽蔑されていたその社会主義は、ひとりでにその目標を達成する。ところが、ロシアの協同組合化がいまやわれわれにとってどんなに大きな、広大な意義をもつようになったかということは、かならずしもすべての同志がはっきり理解しているわけではない。ネップを採用したことで、われわれは、商人としての農民に、私的企業の原則に譲歩した。まさにそのために（普通考えられているのとは反対に）、協同組合化が巨大な意義をもつようになっているのである。じつを言えば、ネップの支配のもとでロシアの住民を十分にひろく、ふかく協同組合に組織することこそ、われわれが必要としているもののすべてである。というのは、私的利益、私的商業の利益と、国家によるこの利益の点検および統制とをどの程度に結合すべきか、私的利益をどの程度に公共の利益に従属させるべきかということは、以前にはじつに多くの社会主義者にとってつまずきの石となったが、われわれはいまではこの度合いを見いだしたからである。じっさい、すべての大規模な生産手段を国家が支配していること、国家権力がプロレタリアートの手に握られていること、このプロレタリアートと幾百万の小農民および零細農民とが同盟を結んでいること、農民にたいする指導権がこのプロレタリアートに確保されていること、等々—これらは、われわれが以前に小商人的だとして鼻であしらっていた協同組合、またある面ではいまネップのもとにあってもやはり鼻であしらうのが当然な協同組合によって、もっぱら協同組合だけによって、完全な社会主義社会を建設するのに必要なすべてのものではないだろうか？これは、まだ社会主義社会の建設ではない。しかし、これこそ、この建設のために必要で十分なすべてのものである。」（『レーニン三巻選集』９。１４４１～２頁）

レーニンの論旨は明解である。ロシアにおいて国家権力が労働者階級の手に握られ、全ての大規模な生産手段の国有化が実現されたとき、協同組合の役割も、それが資本主義の下ではたしていたものとは根本的に変化してきて、協同組合運動がかかげてきた社会主義は現実性をもってくる。ネップのもとでは住民を協同組合に組織することだけが、完全な社会主義社会を建設していくうえで必要な全てのものだ、と。

ところがロシアでは、住民を協同組合に参加させるうえでの決定的な不利が存在している。この不利を克服する手段として、レーニンは文化革命を提起した。「この問題には、また他の側面もある。すべての人をひとりのこらず協同組合の取引に参加させ、しかも受動的にではなく、能動的に参加させるために、われわれがまだしなければならないことは、『開化した』（なによりもまず読み書きのできる）ヨーロッパ人の目からみれば、ごくわずかなことである。じつを言えば、われわれがまだしのこしていることは、

ただつぎのこと『だけ』である。すなわち、わが国の住民が、協同組合にひとりのこらず参加することがどんなに有利であるかを理解して、こういう参加を組織するほどに、彼らを『開化』させるということである。ただこれ『だけ』である。いまのところ、われわれが社会主義に移るには、これ以外にどんなたいした工夫もいらない。けれども、これ『だけ』のことをやりとげるためには、完全な変革が、人民大衆全体の文化的発展の一時代が、必要である。」（１１４５頁）

レーニンとボリシェヴィキ党は、革命の前までは協同組合主義に反対してきた。この歴史的事実を整理した上で、ネップの下での協同組合の成長が社会主義の成長と同じ意味をもっていること、協同組合の成長のためには文化革命が必要なこと、ロシアでの文化革命の困難さ、等々について、レーニンは次のように述べている。すこし長いが重要な箇所なので引用しておこう。

「私の考えを説明しよう。ロバート・オーエン以来の古い協同組合活動の計画の空想性は、どういう点にあるのか？それは、彼らが階級闘争、労働者階級による政治権力の獲得、搾取階級の支配の打倒の問題というような基本問題を考慮しないで、社会主義による現代社会の平和的改造を夢みていた点にある。だからこそ、われわれがこの『協同組合的』社会主義をまったくの空想と考え、住民を協同組合に組織するだけで階級敵を階級協力者に変え、階級戦争を階級平和（いわゆる国内平和）に変えることができるという夢に、ロマンティックなもの、それどころか卑俗なものさえ見いだすのは、正当なのである。

現代の基本的任務の見地からみて、われわれが正しかったことは、疑いをいれない。なぜなら、国家の政治権力の獲得のための階級闘争によらなければ、社会主義は実現できないからである。

だが、国家権力がすでに労働者階級の手ににぎられ、搾取者の政治権力が打ち倒され、すべての生産手段（労働者国家が自発的に、一時的に、条件つきで、利権として搾取者に貸し出しているものを除いて）が労働者階級の手にある現在、事態はどう変化したかを見られたい。

いまでは、協同組合の成長そのものが（さきにあげた『わずかな』例外はあるが、）われわれにとって社会主義の成長と同じ意味をもっている、と言ってさしつかえない。それと同時に、社会主義にたいするわれわれの見地全体が根本的に変化したことを、われわれは認めないわけにはいかない。この根本的変化とは、以前にはわれわれは政治闘争、革命、権力の獲得、等々に重心をおいていたし、またおかなければならなかったが、いまではこの重心が移動して、平和な、組織的な、『文化的』活動におかれるようになった、ということである。国際関係さえなかったなら、国際的規模でわれわれの地位をまもるためにたたかう必要さえなかったなら、私は、われわれにとって重心は文化活動に移りつつある、と言うことをはばからない。だが、この問題を別とすれば、国内の経済関係にかぎってみれば、いまではわれわれの活動の重心は、ほんとうに文化活動に移ったのである。

われわれは、一時代にわたる二つの主要な任務に当面している。第一には、三文の役にもたたない、前の時代からわれわれがそのまま受けついだわれわれの機関を、つくりかえるという任務である。この点では、われわれは、闘争の五年間に重大な改造をおこ

なう余裕はなかったし、また余裕があるはずもなかった。われわれの第二の任務は、農民のための文化活動である。そして、この農民のあいだでの文化活動の経済的目的は、まさに協同組合を組織することにある。全農民が協同組合に組織されれば、われわれはすでに社会主義の基盤にしっかりと足を踏まえたことになるであろう。だが、全農民を協同組合に組織するというこの条件は、農民（まさに膨大な多数者としての農民）の高い文化水準を前提するので、完全な文化革命なしには、全農民をこのように協同組合に組織することは不可能である。

われわれはあまり文化的でない国に社会主義を植えつけるという無分別な事業を企てていると、いくどもわれわれの敵に言われた。しかし、われわれは理論（あらゆる衒学者の理論）によって予定されたはじから始めなかったという点で、またわが国では政治的および社会的な変革が文化の変革、文化革命に先行したという点で、彼らはまちがっていた。それでも、われわれは、いま結局この文化革命に直面するにいたったのである。

われわれにとっては、この文化革命さえおこなえば、わが国を完全に社会主義的な国とするのに十分である。だが、われわれにとってこの文化革命は、純文化的な困難（なぜなら、われわれは文盲だから）も、物質的な困難（なぜなら、文化的となるためには、物質的生産手段のある程度の発展が必要であり、ある程度の物質的基礎が必要だから）もふくめて、測りしれない困難に満ちた仕事である。

１９２３年　１月６日」（１１４９～５０頁）

このレーニンの提起は実現されなかった。現実には、１９２９年から、農業の全面集団化がとりくまれたが、それは国家権力によって強制的になされたものであり、文化革命とは正反対のものであって農民を低い文化水準に閉じ込めることとなった。そのため、全面集団化によって形成されたコルホーズは協同組合とは名ばかりで、生産者の自由はなく、労働生産性の向上は成し遂げられず、以降ソ連崩壊にいたるまで、農業はアキレス腱となったままであった。

（三）プロレタリアート独裁の諸問題

レーニンの協同組合主義に対する批判は、それが「搾取階級の支配の打倒の問題」を考慮していない、という一点にあった。だから、もし、この「支配の打倒の問題」が新しく把えなおされれば、協同組合主義の限界を、レーニンとは別の様式で克服することが課題となるはずである。

いま問われているものは、プロレタリアート独裁の理論を右から投げ捨てることではなくて、それを左から、つまりはその「意志の自然的、かつ精神的限界」を示すことによって、その理論を継承することである。

右からの批判は、プロレタリアートの独裁の理論に対して、全て、民主主義を対置している。構造改革論も例外ではなく、その対策は民主主義的変革であった。その立場を結局は民主主義と商品経済（市場経済）を永遠化することになる。それゆえ、問題は、民主主義と商品経済をどう克服するか、というところにある。

協同組合主義は限界はあったにしても、もともとこの問題に正面から向き合っていた。マルクス・レーニン主義からの批判を受け入れてしまったことによって、多くの協同組合運動は、この初期の理念を捨ててしまっているが、今こそ、この理念に立ちかえることが必要となっている。

ところで、プロレタリアート独裁の理論を継承するためには、二重権力を形成していく戦術を提起できなければならない。すでにパリ・コミューンでさえ、ベルサイユに逃亡した旧政府との二重権力であったが、ロシア革命の場合、それは、ソビエトと旧政府を改組した臨時政府の二重権力となった。双方の権力の力くらべの時期があったのち、臨時政府を武装蜂起によって打倒してプロレタリアートの独裁が実現されたのであった。

他方、中国革命の場合、二重権力は、中央政府と解放区との関係となり、国家と国家との関係となった。そこで展開されたものは、内乱ではなくて内戦であり、革命戦争が戦術となった。

この革命戦争は、もちろん毛沢東と中国共産党の打ち立てた戦術であったが、そのお手本は、プロレタリアートの独裁を樹立以降ソ連で展開された内戦にあった。

そして、文化大革命の時期に中国共産党の戦術に影響を受け、ベトナム解放戦争をはじめとして第三世界で斗われた革命戦争に連帯して、日・米・西欧でも革命戦争の戦術が試みられた。これらの試みが明らかにしたものは、もはや地理的な意味での解放区を形成しうる時代は終わった、ということである。第三世界においては民族解放が解放区形成の主要なスローガンであったが、その人民結集力は低下してきている。そこで出てきたものは、文化圏の形成による二重権力の形成である。この試みは、地理的解放区の形成には直接的にはつながらないが、第三世界の民衆の運動の基本になりつつある。

そこで、文化圏の形成から二重権力を展望する、という道が開かれていることがわかる。文化圏の土台は経済圏であり、もう一つの生き方、働き方を求めている人々のネットワークである。このように問題を立てると、ネップの下でレーニンが構想した社会主義建設論としての協同組合論とのつながりが見えてくる。

（四）今日の課題

資本主義の真っ直中で、資本主義の文化、つまりは商品・貨幣・資本に意志を支配されたライフスタイル、とは異なったライフスタイルに裏付けられた新たな文化圏を形成していけるかどうか、このことが全てを決定する。

レーニンは、ネップの時期に協同組合を社会主義の建設を進めていく全てを決定するものと把えたが、このレーニンの発見は活かされることはなかった。なぜなら、この社会主義の萌芽を育てていくべき文化革命の理論と実践が未形成であり、レーニンの後継者たちも、それを形成していくことができなかったからであった。そこでボリシェヴィキ党の伝統的政治手法にたよることになり、結果として、この萌芽をふみつぶしてしまったのであった。

このネップにおける協同組合の悲劇をふまえるならば、今日問われているものは、この新たな文化圏を形成していく理論と実践の確立である。ところが、この理論と実践は、旧来の手法の届かないところにある。とすれば、結局一つの典型的な実例をつくりだすことから始めなければならないのだろう。すでになされている多くの試みのどれが典型にまで自己を形成することができるのだろうか。少なくともそのような問題意識をもった集団の形成は始まっている。

文化人類学ノート

サーリンズ『人類学と文化記号論』　　安藤一夫

（1）問題接近の観点

学問としての文化人類学の対象は、いまだ資本主義のシステムにとらえられてはいなかった、現存する人類社会である。ところが、この対象を研究している学者には、資本主義のシステム及び今日支配的となっている社会と文化の歴史的な特殊性についての明確な意識を持っている人々はほとんどいない。

だから、文化人類学の業績は、今日の支配的な社会を基準にしてその他のもろもろの人類社会を分析することから生じることになる。とはいえ、対象となっているもう一つの社会は、今日の支配的な社会を写し出す鏡の役割を果たしている。人類学者にもこの鏡としての役割を意識している人は多く、人類学の研究によって得られた知見を、現代文明の批判として構成する試みも多い。

従来それでいいのではないか、と考えてきたが、いざ人類学が提起している現代文明への批判をまとめる仕事に取り組んでみて、観点の不十分さが明確になってきた。そこで、問題を転倒させ、私自身の文化人類学の対象を今日支配的となっている社会におき、文化人類学が蓄積した業績を分析用具にする、という見地から、文化人類学に取り組むことにしたい。

このような問題意識からなされた研究として、サーリンズ『人類学と文化記号論』（法大出版会）がある。この研究の内容を紹介しながら、ウオーミングアップを開始しよう。

（2）モーガンとその実践理性の批判

私にとって一番理解しやすかったのは第二章、文化と実践理性―人類学理論の二つのパラダイムであった。まず、モーガンとボアーズが対比され、二つのパラダイムが明らかにされる。「実践理性が意味づけの論理か」（７５頁）というように対比されているが、この二つのパラダイムについては、序言で簡潔に述べられている。

実践理性＝「人間文化が実践活動からなりたち、その背後に功利的な利害が潜んでいる、という考え方」（１頁）

意味理性あるいは象徴理性＝「人間固有の特質は、他のすべての有機体と分有する状況としての物質界のなかで生きねばならぬことではなく、まさに人間の能力の独自性を示す、自ら考案した意味体系にしたがって生きているという事実にある。それゆえ、文化が物質的制約に順応しなければならぬという事実ではなくて、決して単一ではない一定の象徴体系にしたがって、このことがおこなわれるという事実を、文化の決定的特質―それぞれの生活様式に、それを特徴付ける固有性をあたえるものとしての―だと考える」（２頁）

実践理性を代表する者としてとりあげられている『古代社会』の著者モーガンに対し、サーリンズは次のように切る。

「モーガンの用語法と現代の構造主義の話法とのある種の類似―すなわち、《精神の

自然な論理性》にしたがって、人間の欲求や必要に応えて開花してゆく思想の原初の萌芽を引き合いにだすこと―にだまされないことが肝要だと思われる。モーガンの理論では、精神は、文化の作り手としてよりも、むしろ文化発展の用具としてあらわれている（ｃｆ．Ｔｅｒｒａｙ １９７２）。能動的ではなく受動的で、象徴的ではなくたんに合理的なものと考えられている人間の知性は、自らが産出したり組織したのではない状況に反射的に反応するだけであり、したがって、とどのつまり文化は、実践論理―初期には生物学的な、後期にはテクノロジー的な―の実現形態となってしまう。概念の体系は、人間の経験を構築したものではなく、親族の類別化同様に、経験を言語化したものであり、たんに経済ないし生物学的利益から発生する、諸関係の事実上（ｄｅ　ｆａｃｔｏ）の秩序づけの表現にすぎないわけである。モーガンにとって、思考とは認知であり、概念化とは知覚であり、言語とは、すでに固有の原因を持つ区別づけの反映にほかならない。文化の象徴的な性質は、モーガンの体系にはあらわれてこないのである。言語は、そこでは、たんなる事物の名前にすぎない。」（７６～７頁）

サーリンズによれば、モーガンの議論の大筋は、「自然の制約から行動的実践へ、行動的実践から文化制度へ」（８０頁）と要約されるが、この論理だと、モーガン自身も強調している動物と人間との精神作用の類似性の確認に終わってしまい、人間の文化には到達できないことになる。ではサーリンズにとって、人間の文化とは何か。

「概念や意味に関する限り、語はたんに外界に関連づけられるだけではなく、まず言語のなかの自分の位置に、つまり他の隣接語に関連づけられる。類縁語との示差によって、モノにたいするその語の価値づけが構成され、この示差のシステムのなかに、現実の文化的構成があるわけである。いかなる言語活動もたんなる名称の一覧表ではない。一つ一つの辞項が、客観的弁別《とかいうもの》と、一対一の対応をしている、たんなる集合ではないのである。どの言語活動も、所与の弁別に一定の価値を賦与し、そのことで客観的現実を、その社会特有の別の特質において構成している。じっさい、全体的な社会射影図であるかぎりにおいて、象徴活動は同時に総合的でもあれば分析的でもあって、文化の論理全体を概念に集中させるよう誘ってゆく。というのも、一方で、言語価値の差異が、一定の原則にしたがって外界を分割することで、外界の独自な裁断をおこなっているが、他方では、こうして分離された諸要素は、差異間の意味づけの対応によって再編成されているからである。私はここで、たんに意味論的弁別についてだけではなく、文化の諸問題についてもいっているのである。そして、後者の象徴的恣意性は、前者のそれよりはるかに大きいといえるだろう。すくなくとも理論的には、単一の語彙素の意味場には、自然な限界がある。たとえば、いかなる言語も、同時にかつ排他的に、牛とイセエビの二種類を意味することは出来ないだろう。だが、《ステーキとロブスター》という風変りな取り合わせに食事を決めているアメリカ人なら、この同じ例から、文化は類似の制約に従ってはいないことがわかるはずである。文化体系のなかでのなんらかのモノのクラス分けにかんしては、アプリオリに確定できる理論的限界はないと思われる。「姻戚は、象の腰である。」命題論理は驚くほど変化するのであり、単一の同じ世界のなかにあって、文化もまたそうなのである。

要するに、客観的現実の象徴的価値づけと総合とによって、われわれは、弁別的な固有性を持った、新しい種類のモノ、文化を創造する。言語活動は、この射影図の特権的

な手段にほかならない。だが、モーガンにとって、言語とは、分節された知覚にすぎなかった。したがって、モーガンの目からすると、自然から文化への移行は、いってみれば、『オデユッセイア』を語りの形から書かれた形態へと変形するよりも、重要なことではなかったのである。一流のあるマルクス主義者が、最近カウツキーについて次のように書いたが、これはモーガンにもそっくりあてはまるだろう。彼にとって、「人間史は自然史の一付属物であり、その運動法則は生物学的運動法則の、たんなる現象形態にすぎない。」（８３～５頁）

サーリンズのモーガンに対する批判が妥当かどうかについてはいまは問わない。文化相対主義の立場に立つサーリンズの説が、ここで明らかにされている。

（３）ボアーズの意味理性

ではボアーズについてはどうか。サーリンズは「モーガンの考え方では思考と言語活動が記号として機能していたが、ボアーズの考え方では、思考と言語活動は本質的に象徴の問題系として機能していた」（９２頁）と見ているが、ボアーズからの引用を次に紹介しよう。

「言語は、それを構成する音声学的要素や子音連結の性質において異なっているだけではなく、不変の音声学的群のなかに表現される観念群においてもまた異なっている…。言語によって表現しようとする個人的経験の全範囲は、無限に変化し、しかも有限数の語幹によって表現しなければならないのだから、経験の広汎なクラス分けが、必然的にすべての分節的な言語の基礎でなければならない。

このことは、人間の思考の根本的特徴と一致している。われわれの現実の経験では、まったく同一である感覚＝印象や情緒的状態は二つとない。われわれはそれらを、その類似性にもとづいて、広狭いずれかの群にクラスわけするが、その境界は、見方がちがえばちがったふうに画定される…

多種多様な文化では、このクラス分けは、根本的に異なる原理にもとづいておこなわれているはずである…。たとえば、色彩は、その類似性にしたがって全く異なる群にクラス分けされているのが観察されるが、色彩の特徴となる微妙な差異にしたがって区別されているわけではない…。言説や思考のなかで、黄色〔がかった〕緑ないし青〔がかった〕緑という群のクラス分けにしたがって、語が違った光景を描き出すという事実の重要性を指摘したとしても、さして誇張ではないだろう。」（９３頁）

ある自然物は文化によってその意味を変えるから、それがどういう意味をもつかは文化が決める、という文化相対主義の立場の原型がここにある。この文化相対主義は個々の実例を示す場合は常識として理解できる。しかし、これを理論として一般化しようとすれば一体どうなるだろうか。実践理性と意味理性についての一定の観念が形成されたので、サーリンズの史的唯物論批判に移ろう。

（４）史的唯物論の批判

サーリンズはマルクスの『経済手稿』を高く評価し、そこに書かれている人間観、自然観、つまりは文化観は、ボアーズの文化人類学と同じ地平であったと見ている。しかし、『ドイツ・イデオロギー』で提起された史的唯物論が、上部構造を下部構造に還元

することによって「唯物論はその中から文化を排除し、文化をこえた現世的論理に文化を従属させ」（１７７頁）てしまった。「意識は意識された存在以外のなにものかでありうるためしはなく…」という部分を『ドイツ・イデオロギー』から引用したあと、サーリンズは次のようにコメントしている。

「だが、生産からこのように概念秩序を追放すると、人間の概念把握に無秩序が生産されてくる。マルクスが続けていっているように、象徴秩序を生産から排除したのも、人々の頭脳に形成された《幻影》、《物質的生活過程の必然的昇華物》として、再現するためにほかならなかった。そのうえ、概念作用は、いかなる内的論理も、その内にいかなるシステムももってはいないので、自立性も歴史をももたない。結局、意味づけの体系はそれ自体の内になんの起動力ももたず、不可欠な生産手段と生産関係との反映から力をくみとっているだけにすぎない、ということになろう。」（１７９頁）

つまりマルクスは象徴秩序を認めはしたが、それを幻影としてしまったために、その独自の役割を認識できなかったというわけである。「マルクスは、象徴過程を、その象徴作用の二次的性質―ボアーズのいう《二次的形成物》―として、意識のなかの所与のシステムのモデルとしてしか把握せず、このように象徴されたシステムもそれ自体また象徴的であることを無視してしまった。」（１８４頁）という論点が、サーリンズの史的唯物論批判のポイントである。

この批判は、『ドイツ・イデオロギー』に対する批判としては的を得ているであろう。しかし、この見地から、サーリンズが、『資本論』の商品論を批判しようとするとき、そこにこの見地の限界があらわれてくる。いま、その現場に立ち合おう。

（５）「使用価値の社会的規定」

サーリンズは、マルクスが『資本論』で展開した商品の分析をとりあげて、商品の使用価値のとりあつかいに疑問を提出している。

「私が指摘したいのは、美ではなくて、ある象徴秩序の内部で、文化の内部でおこなわれる生産の規定性にほかならない。『資本論』のなかでマルクスは、なぜ一定の小麦が、Ｘキンタルの鉄と等価であるかを説明するのに、多くの筆をついやした。平均的に必要とされる社会的労働との関係から等価率を説明するその解答はたしかに鮮やかなものだが、しかしなぜ小麦であり鉄であるのか、なぜいくつかの商品は生産され、交換されるが、他の商品はそうされないのかの理由をわれわれに示してはいない。」（１９７頁）

この批判でサーリンズが何を言おうとしているかはあとで判明していくが、とりあえず彼の展開を追っていくと、マルクスが商品の神秘性をその交換価値に求めそれとの対比で使用価値をわかりきったものと捉えてしまったところに問題を発見している。

「だが、商品の物神性とくらべてのこの意味作用の透明性を獲得するために、マルクスは使用価値の社会的規定をすてて、《人間的欲望》を充足させる商品という生物学的事実ととり替えざるをえなかったことに注目しておかねばならない。これは、生産とはたんなる人間生活の再生産ではなく、一定の生活様式の再生産であるという、そのすぐれた理解にも反することにほかならない。

こうした（文化的）理解からは、有用性とはすべて象徴的なものだということが帰結

されてくるだろう。《効用》がある文化秩序に固有の《欲求》概念であるかぎり、人々のあいだの示差的関係―男女の衣服間の色や線や織り方の対照が性の文化的価値を意味しているように―の表象を、効用はモノの具体的特性を通して必然的にあらわしているはずである。《欲求の体系》はつねに相対的なものであり、肉体的必要性によっては説明できず、したがって定義上象徴的なものにほかならない。ところが、マルクスにとって、抽象的な商品形態のもとでのみ、人々のあいだの関係が事物のあいだの関係としてあらわれる。社会的な意味づけが知覚的な自明性から、象徴的なものが《自然的なもの》から区別されるように、まさにそれと同じく、この《物神性》を彼は、使用価値から区別しているのである。「真珠やダイヤモンドのなかに交換価値を発見した化学者はまだ一人もいない。」商品形態の《神秘な》性質だけが、ソシュール的な記号概念に対等な定義に相当する。「感覚的であると同時に超感覚的である社会的なもの」となるからであり、同様に、交換価値形態のもとでのモノへの意味付与だけが、言語の形成と比較できることになる。」（１９８～９頁）

サーリンズの批判のポイントは、マルクスが「使用価値の社会的規定」を捨ててしまった、というところにある。サーリンズにとっては、Ｘ量の小麦＝Ｙ量の鉄という商品の交換式での問題は、何故小麦と鉄とがここで登場するか、という点にあり、これこそが「使用価値の社会的規定」を解明することから明らかにすべきだ、ということなのだ。

マルクスは交換価値の社会的規定を明らかにしたが、同様に、使用価値についても、その社会的規定を明らかにすべきだった、というのは、「使用価値の社会的規定」とは、使用価値の内容が、ある文化秩序に固有のものだからであり、この意味で欲求の体系は象徴的なものであって、これを自明な自然物に還元することはできないから。このような見地をサーリンズは、別のところで、もっと具体的に展開している。

「とはいえ、マルクスは、すでにみたように、商品形態（物神性）にあるモノにのみ、象徴性を留保していた。使用価値は、その明白な属性のせいで、人間の必要に役立つのは明々白々だと臆断して、どんな歴史形態でも生産の理解に必須な、人々とモノとのあいだの意味づけの関係を不問に付してしまった。「欲求のシステムと労働のシステムについて、どのようにとりあつかうべきか」というその問いには、答えられないままだったのである。

答えを考案するには、生産を文化的に説明するためには、あるモノを、あるカテゴリーの人々に有用なものとする社会的意味は、その自然的特性からも、交換過程で付与される価値からもでてこないということを明記することが決定的だろう。使用価値は、商品価値に勝るとも劣らず象徴的で、恣意的なものである。なぜなら、《効用》は、モノの性質ではなくて、客観的な諸々の性質の意味作用にほかならないからである。牛は《食物》だが犬は食べられないとアメリカ人が考える理由は、感覚の問題でもなければ肉の値段の問題でもない。同様に、ズボンが男性の、スカートが女性の印であることは、その物理的特性やそこから発生する関係と何の必然的な相関性をもっているわけではない。ズボンが男性のために、スカートが女性のために生産されるのは、モノそれ自体の性質や、物質的欲求を充足させるその能力によってではなく、むしろ象徴システム内でのその相関性によってなのである。同様に、男が通常生産にたずさわり、女がたずさわらないのも、男女の文化価値のゆえにほかならない。いかなるモノや事物も、人間が与

える意味作用によって以外は、人間社会のなかで存在することも、移動することもできないのである。」（２２５頁）

ここでのサーリンズのズボンとスカートのたとえを借用しよう。スカートが女性にとっては使用価値ではあっても男性にとってはそうではない、ということが「使用価値の社会的規定」だとすれば、サーリンズはある使用価値と他の使用価値とを比較していることになる。

しかし、他の使用価値との比較は、人と人との社会関係の表示にすぎず、この比較においては、物の自然的性質は何の働きもしてはいない。したがって、この比較において、使用価値はもはや使用価値としての質を失っている。

サーリンズの説は、レヴィ＝ストロースのトーテム論を利用している。レヴィ＝ストロースは、各種の動物名称でそれぞれの族の内部編成が示されていることについて、動物に意味があるのではなくて、各種の動物の種差、という自然界の差異を利用して、社会における人間の格差を表現していると解読した。サーリンズに立ちかえれば、各種の使用価値の差異が文化の表現に役立っているのであって、使用価値自体がその役割を担っているわけではないことになる。

ズボンが男を象徴し、スカートが女を象徴するということは、たしかに「象徴システム内でのその相関性によって」ではあるが、これは文化による使用価値の意味づけであって、この意味は使用価値の属性ではない。とすれば、使用価値の意味と意味とを関係させてみても、そこに「使用価値の社会的規定」が出現するわけではない。

また、ズボンが男を象徴する、といっても、ズボンが男性的なものを表現しているだけで、男を生み出せるわけではない。個々の使用価値の文化的意味は、使用価値に対して外から与えられるものであって、それに内属するものではない。従って、それは使用価値が社会を規定しているのではなくて、逆に、社会によって使用価値が規定されており、「使用価値の社会的規定」ではなくて、使用価値の社会的被規定性である。

もともと使用価値は、人と物との関係である。ある人とあるものとの関係と、他の人と他のものとの関係から、あるものと他のものとの関係を導き、この物と物との関係が、ある人と他の人との関係を示していることを解明しようとするのがサーリンズの試みなのだが、これは手の込んだコトバ遊びでしかない。

（後記）

文化論についてまとめようと思いたって仕事をはじめたところ、文化人類学にゆきつきました。この領域は、イギリスの有名な人類学者、エドマンド・リーチの『社会人類学案内』（岩波書店）に「私の性に合った人類学」という章がある位、一人一説の世界です。そのせいで参入障壁は低く、新規に研究を始めることが可能です。そこで、しばらく、この分野のノートを続けることにしました。「性に合」えば読んでみて下さい。